
破壊屋

全力疾走

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破壊屋

【Nコード】

N8514B

【作者名】

全力疾走

【あらすじ】

看板《破壊屋》アナタの願いぶち壊します《》の下、今日も破壊屋は働きます。アナタが望む人間関係を作るためにアナタの物をぶち壊します。あつ殺人依頼は却下です。道を極める人に頼んで下さい。

「ご注意（前書き）」

注意、この文章には血や暴力はほとんど無いです。ただたまにグラビア程度のセクシーが入ります

「注意」

…まず、この話を聞く前に名前だけでこの物語がバイオレンスに血に戦いに溢れたストーリーだとは思わないでいただきたい。

私は争いは好まないし、血は怖い。

当然（例外はあるのだが）人を殺したりもしません。

この事を頭の隅にでもおいていただけると大変ありがたいわけです。

…いやいや、最近この名前からまるで殺し屋のような依頼を注文してくる方が後を絶たなくて…

あつ、勿論断っていますよ。そんな事やってたら命が足りません。

私は、その人が望んだ事をする普通のビジネスマンと同じです

ただ仕事内容が壊す事、ここがポイントですね、《壊す》は殺す消すといった一個人の肉体的存在否定、及び抹消とは違います。壊すのです、対象は依頼人の物に限ります、つまり他人は無理ということです。あくまでもその依頼人の物だけです

さて、破壊屋について理解していただけたでしょうか？

以上の説明をご理解いただけたなら、どうぞご注文下さいませ…

ご注意（後書き）

切に求めます。

誰かこの小説のジャンル教えてください。

破 1・前 懐（前書き）

拙い文章ですが、興味があったら読んでください。そしてまあ許せるだろと思ったなら評価下さい

破く1・前へ懷

いつもの日常…

平和に満ちたり、満ちたりすぎて溢れだすような毎日。

溢れた物は暇となる。なんでも適量が一番です。

さて、ここは都内の一軒家

ある主婦が今日のお客様です

目覚まし時計が鳴り響き今日が始まる、いや、毎日が始まるっ
といったほうがいいのかしら？

朝6時40分に起床。

隣の夫を起こし

私はすぐに1階のリビングへ移動。そしてキッチンで朝ご飯を作り、
テレビを見ながら夫と食事。

7：40

夫を送り出す

その後、私も顔を洗って歯磨きして、ようは身支度をして、少しゆ
っくりしてから、洗い物をして。
午前中を終える

13:00

昼のドラマを見ながら食事

その後

掃除

買い物

散歩や運動

晩御飯の用意

そして20:00

夫が帰って来て食事

テレビ鑑賞や色々やって

0:00

就寝

これが私の毎日……

無限とも思える繰り返し

私は今30才だ、26才の時に寿退社。まだ子供はいない

はぁー独身時代が羨ましい……

毎日毎日生きてるって感じがあの時にはあった……

今はまるで毎日がデジャブ……もちろん近所の人とコミュニケーションとか友達とかとお茶したりはするけど、それは退屈しのぎにしかならなくて、まるで私を満たしてはくれない……

夫とのプライベートも最近はマンネリ……

こんな日常はもうイヤ。
新しい流れが欲しい！

だからといって私は夫を愛してる…浮気とかは頭に無い

「はぁー、まったく、退屈ね…」

ひとりリビングで呟く

そういえば昨日テレビでインターネットサーフィンとか言ってたわね…………

私もやってみようかしら……

席を立ちリビングの窓際にあるパソコンに向かう、起動音がカチカチ鳴っている…

インターネットの検索画面が開いた……

ここで一つある事に気づく…………何について調べようかしら？
波が無いならサーフィンなんて出来ない……

料理？インターネット通販？運動？……………ダメだわ、全部日常から出れてない。

「ダメね、これじゃあ…」

インターネットを閉じようとして、フツと窓を見る、もう春だ…全然気付かなかった……………何か、寂しいような…孤独感が込み上げてきた。

「…よし、調べてみよう」

変化？ダメね、アバウト過ぎて半端無い検索数が…

改革？政治情報ばかりね！！
革命！？な！？ナポレオン！？
キリが無いので少し考えてみる…

「私が一番したい事って…この日常の、破壊？」

検索……《破壊》

うわ！？凄いマイナーポイ物が……

ま、まあ少し見てみよう…

あるチャットサイトにつながった

28 2、2518：30 恋するキリンさん

今の彼氏と別れたいんですが、彼氏しつこい子なんです、きりだせません、どうしたら別られますか？

29 2、2418：35名無しさん

素直に言えばいいじゃん？

30 2、2418：40名無しさん

なんなら、別れさせ屋みたいな人に頼めば？

3 1 2、 2 5 1 8 : 4 8 恋するキリンさん

あの30さんその別れさせ屋って人達の事もう少し教えてくださいますせんか？

3 1 2、 2 5 1 8 : 5 0 名無しさん

いや、俺は大学の友達にそういうあだ名の奴がいて、ソイツに頼んだだけだよ

3 2 2、 2 5 1 8 : 5 6 名無しさん

え？なんだ？破壊屋の事じゃないの？

…破壊屋？なんかヤバそうな名前ね……

3 3 2、 2 5 1 9 : 0 0 恋するキリンさん

え？なんですか、破壊屋って……

3 4 2、 2 5 1 9 : 0 6 名無しさん

うーん、都市伝説みたいなもんで、なんか人間関係を壊す人達がいるんだって、わざとじゃなくて、仕事で。

しかもその依頼人が望んだ通りの関係にするんだって。

3 5 2、2 5 1 9 : 1 5 名無しさん

なんだ、別に都市伝説ばく無いじゃん

浮気とかだろ？それって？それぐらいなら興信所でもやってるって

：

3 6 2、2 5 1 9 : 1 9 名無しさん

いや、そんな表に出せるような事ばかりしてるわけじゃないみたい
……なんか、場合によっては殺すらしいよ？しかも、浮気とかじゃ
なくて、人間関係の破壊なの！！

そんなの普通にできるわけないじゃん、相当骨が折れる仕事だよ。

…コワッ！！殺してるってもはや殺し屋じゃない！！

そんなの私望んでないしな……でも、今の人間関係の破壊、私が望
む物へ……少しだけ興味あるな……

検索……………《破壊屋》

エラー表示

なにやら、回線が込み合っているらしい。

画面に喰らい付く姿がきつと滑稽だろうな……とふと思う。

…もっ…………なにしらべてんだろ、私は……

更新ボタンを押した

画面が開く

検索結果は1件…？

おかしい、この手の名前ならもっとヒットするはず……

なにかイヤな汗が流れる

破壊屋をクリック。

表示された画面は予想に反して明るい。

花柄の背景に薄いけどしっかり読める文字が書かれている

注意！！

このサイトは殺人依頼を受けるものではありません、当サイトは一切そういった依頼には関与せず、場合によっては警察に連絡いたします

なんだ普通にネーミングセンスがダメなだけね…

いくつかの、選択項目がある。

まあまずは………

破壊屋とは？

をクリック

音声プログラムが流れる、凄く落ち着いた、紳士的な話し方だ

ようこそ、貴方様はこのサイトに何を求めて来られましたか？
当サイトは理由はどうあれ、今の人間関係に何かしら不満がある場合の助け船的な、役割を担う物です。けして人に危害を加えるためのサイトではありません。それだけは覚えておいて下さいませ

次に、いくつかの選択肢が出てきた。

- ・ 請け負う仕事内容
- ・ 手段、方法
- ・ 料金
- ・ 質問板

えつとどうしよう、まあ順番に見ますか…

- ・ 請け負う仕事内容をクリック

また音声プログラムが再生される

私達、破壊屋が請け負う仕事内容は主に人間関係の改善、改造です
……

具体的には例えば日常の打破、恋人との決別の手伝い、いじめ、家庭内暴力などなどです

なんだ、普通じゃん……いや、普通が一番なんだけど、なんかガツカリね

- ・ 手段、方法

をクリック

っていうか、なんかもつと違う言い方出来たんじゃないの？

手段、方法って……

また音声プログラムが流れはじめた。

手段につきましては、最善かつ安全そして、後がキレイさっぱり、なにより気付かれないようなプランを用意いたします
そしてお客様がそのプランからお好きな物を選んで頂きます。
なるほどね…

じゃあやっぱり一番気になる……

・お値段
をクリック

料金につきましては、お客様に選んで頂いた、プランによって多少の違いがございますが…平均としては、最高値3、0000円 最小値1、0000円となっております

やっぱり結構するわね…

ま、別に本気で頼もうなんて思って無かったしね。

窓の外がオレンジ色になってきていた。

時間は5時…

あつ…買い物に行かないと。
ま、暇潰しにはなったわね。
それだけで良しとしよう。

近所のスーパーで買い物を済ませ、今日は簡単な物で済まそうと晩
御飯の事を考える、一般的かつ典型的な主婦、これ以上何を望む？
食べて笑えて暇できる、それで平和に生きていけるんだから素晴らしい人生じゃない。

ダメね…夕焼け色なんて気にしないけど、この時間はセンチメンタルになるわね。

帰り道ってやっぱり退屈ね…

家に帰り、いつもどおりに支度する、いつもどおりの私

夫に笑顔でお出迎え

あなたの疲れ顔はもう飽きたわ

その後のプライベート
疲れきった夫は使いモノにならない。

あーもう飽きたわ。
なにもかも。

A m 6 : 3 0

また毎日が始まる……もう説明はいらないでしょ？
同じなんだから……

外は風がふいている。昨日の春はどこえやら、今日は曇り空

「貴方はいいわね」
なんて口に出る

風が窓を叩く

雲が流れて花が散った

なにかが頭の中で回転した。

気づけばパソコンの前、画面には破壊屋の文字

私はいや、こんな日常変えたい。

いや、変えさせてもらっわ。・申し込み
をクリック

色々書き込み

理由の欄で手が止まる。

理由……理由なんて、決まっている、今を変えたいから。

送信をクリック

ありがとうございました、後日改めて伺います。

踏み込めた自分には少し驚いた、が、後悔はしてない。
むしろこれからの変化に期待すらしている。

早く来ないかな……破壊屋さん

夫は今日も疲れ顔。

会話もイマイチ

プライベート？言うまでもない

3日後

ピンポン

夫を送り出し暇をしていると、チャイムがなった

……やっと来たのか、待ちくたびれたわ……

「はい、どちら様ですか？」

ドア越しに投げ掛ける

「あつすみません、破壊屋ツス。先日ご連絡頂いたんで、伺いました」

ずいぶん若いわね……10代？まさかね……

疑問に思いながら、ドアを開ける

“黒”…それが彼の第一印象だった

容姿はまあ悪くない

身長177ぐらいに真っ黒な髪、切れ目に、瞳は茶色
問題は…問題は……

「それ、どこの制服？」

服だ、まるで高校の制服だ。

「イヤイヤ、制服じゃないスよ！？だからそんな恐い顔止めましようよ。」

そんな顔に出てたかしら？

「ま、いいわ、立ち話もなんだし、どうぞ」

「どうもツス、お邪魔します」

正直に言おう、今私は不機嫌だ何故って？

そりゃ今のこの状況に対してよ。

空は雲一つ無く。

春は風となつて、猫がジャレつく今日この頃……

私は期待していた、今の生活を打破出来る……と。

その待ち望んだメシアがこの高校生……

なに？私は別に性的欲望を持て余してるわけじゃないのよ??

「いやー平和ですね」コイツオヤジ属性があるのね。

「……で、貴方は何処の高校なの？学校はどうしたの？」

リビングのテーブルに向き合うように座っている私、繰り返すけど

機嫌は悪いわよ。

「だーから、俺は高校生じゃ無いッスよ。バイトでも無いし、真正銘の破壊屋ッスよ。」

「前から思ってたんだけど、そのネーミングセンスは無いと思うわ。」

「……ですよね、俺もイヤだって言っただけですけどね…霧川さ、いや店長がゴリ押しちゃって……」

結構この子も苦労してるみたい。

……このままじゃラチあかないわね。

…ま、いいか、聞くだけ聞いて気に入らなかった辞めればいい

「で、破壊屋さん？私の注文はどうなのかしら？」

本題に入ろう

「………ハイ。今回の依頼内容はこの生活の破壊ですね？」

真顔になった青年、どうしてかしら、なんか、寒気がするわね……

「そうね、今の生活に飽きちゃって、んーつまりマンネリね。何か変化が欲しいのよ。この生活に。」

「………環境をかえるのは至極簡単です。ただ、戻すのはとても大変です。」

そこは私どもは専門外なわけで……用は私達破壊屋は片道切符という事です。」

「つまり今の生活には戻れないの？」

「“今”はこの時にしかありません、また同じような今があってもそれは違う“今”です。……お客様には皮肉かもしれませんが、まったく同じ今なんて無いんですよ。それを承知でなおも依頼しますか？」

「……………」

「私はあまりお勧めしません、今を観る限り幸せではないですか？
古来より欲深き者は欲にやられております。」

「……………貴方の言ってる事も分かるわ。確かにその通りね、でも、何か変化がほしいの、感じ方を変えれば貴方みたいになるのか
もしれない。でも……………」

「分かりました。ならお受けいたしましょう。ただ破壊するのは、
貴方の物だけですよ？」

破壊……………なんか今聞くと重いわね。

「いいわ。お願い。」「それじゃあプランの方です、が、ハッピー
エンドとバッドエンドどちらがいいですか？」

「……………待て待て待て、何ソレ？アバウトにも限界つてのがある
のよ？」

「いやいや、目的地が見えてる冒険よりもサプライズが溢れた冒険
の方が楽しいでしょ？」

「…貴方、人の人生何だと思ってるの？」

「ゲーム」

うわっコイツ人として最悪だわ！！ヒネクレの境地
でも待つて、よくドラマとかだところという風に言っ子の方が良かつ
たりするのよね！！

「……………貴方人生ゲーム得意？」

「あーアレは苦手ッスよ、なんか気づいたら借金だらけで…」

ななななななんですってえ!?

これは人選ミスよ。まずいわ私のハッピーエンドって借金だらけなの!?

「大丈夫ッスよ、人生なんてマスメタに分かりやすいモンじゃないですし。決まりきった事柄はないんですよ。」

「そ、そうなのかしらね。」

「ま、大丈夫ですよ。ハッピーエンドは本当にハッピーですから。」

「じゃあハッピーでお願い、うんとハッピーなやつ。」

「了解しました、じゃあ、この紙に書いてある質問に答えて下さい。」

「分かったわ」

紙にはざっと十個くらいの質問が書いてある。

・御名前

高橋 美香

・ご住所

ー ー ・家族構成

夫、私、子は無し

・望む結果

ハッピーエンド

・今の生活に戻る事はできませんがそれでも望みますか?
ハイ

・貴方は何故それを望みましたか？

今の生活を変えたいから。

・破壊以後クレームは受け付けませんがよろしいですか？

ハイ

以上の事を確認の上契約成立とします。

ふー面倒よね、こういうのって

「はい、書いたわよ。」

「どうも、じゃあお値段は…と、今回は以外と簡単なので、1 / 5 000円ですね。ハイ。お支払は破壊後で構いません。」

「へー、平均どうりね。」

ま、これくらいならいいか。

「ええ。それじゃあ後日また伺います。準備が有りますので。」

青年は席を立った。書類をカバンに入れて。

「いつぐらいになるの？」

「そうですね、多分3日後ぐらいじゃないですかね」

「そつ、じゃあ待ってるわね、変化を…」

「いや、すぐに変化は起きませんよ、多分一年はかかるんじゃないですかね？」

「そ、そんなに!？」

「ええ、手っ取り早いのはあらかたバットエンドですね。」

「そ、そう、……………」

やはり少しは不安だ、変化に不安はつきものだけど。

破壊に至っては不安どころじゃないわけで……

「……やっぱり不安ですか？そりやそうですね、変わらない事を怖がらない生き物なんて存在しませんよ。」

玄関のドアの前に来て、その青年が感付いたように言い出した。

「ええ、やっぱり不安ね。望んだ事とはいえ……ね。」

「まーハッピーエンドを選んだから大丈夫ですよ、悪い結果にはならないですし、大丈夫。」

「それならいいけど、あつ貴方名前は？」

「鞠ッス。」

「ジン君ね。」

鞠は朗らか笑い玄関から去って行った。それから私はなんとなく身勝手な話したが、本当に良かったのか変化なんかを望むのは欲張りなんではないのか……と、考えてしまった

『今の環境に戻すのは大変です』

『幸せにみえますが』

確かにそうかもしれない。

私は忘れてしまっているだけで幸せなんじゃないか？

私が今を生きたら話しは済むんじゃないか？

もー……なんて人間って失うと分かるとそれが大切におもえるのかしらね。

その晩。

私は旦那に聞いてみた。

「ねえ貴方は今幸せ？」

「なんだよ、急に？どうした？何かあったのか？」

夫はまだ30だがご飯を食べるその姿はもうお父さんだ……

「いや、なんでも無い。私今幸せ？なのかな？」

旦那が黙って何か考えている……

「俺は今幸せだと思う。なんだかんだで笑えるし、飯も食えて家もある。……それじゃあダメか？」

「ううん、いいの。それで。ごめんなさい、ちょっと疲れて……」

私がいぶんポジティブシンキングな人と結婚したわね。

「ああ、後は俺がかたずけるから、先休め、な？」

「ありがとう」

もう、こんな時だけ優しいのはどうなの？

3日後

ピンポン

靱君の御登場ね

「……いらつしゃい。」

「ありやりや、元気ないツスねー？何か死神でも待ってたみたいな感じですね……？」

大方凶星：私はこの3日ほとんど寝れなかった…

なのに夫は急に頑張りだして…身体が………おっとこの辺自主規制ね。

「いや、大丈夫よ？ちよつと疲れてるだけ。さ、入って。」

「……お邪魔しますね。」

靱君は靴を玄関で脱いで……アラ？以外ね…ちゃんと揃えてるわ…靴

「あーガキじゃないんでね。」

「えっ?! あつごめんなさい、そうねしっかりしてるものね。」
顔に露骨に出てたみたい

「……………」

「あつ! いや、あの、その人間としてしっかりして事よ? 駄、云々じゃないわよ?!」 「……お褒めのお言葉ありがとうございます。」

靱君が凄く悲しいそうな顔をしたので、必死にフォローする。
さて、今はリビングのテーブルに向かいあって座っているわけだが、

私はブラックコーヒー対して鞠君はココア甘口だ……なんでも本人曰く、

「自分格好より中身ですから、ココアで！」
だそうだ。

そう…飲めないのね。コーヒー、そして中身って……うん、まだ子供なのね……鞠君

「さて、仕事の方なのですが、この薬にを飲んでください」

鞠君は粉薬のパックを20個程出してきた。

………って薬!??

「え?薬って、え?いや私その…」

「大丈夫違法薬のチョコとかキノコじゃないツスよ。漢方薬です。」

「か、カンポー?」

「そツス、害はありません。で、結構強力なんで一日一回寝る前に飲んで下さい。…で万能なんで旦那さんにも上げてください。んで、これ3ヶ月分有りますから」

鞠君は朗らかに笑っている。

危ないお薬じゃないのは分かったけど……

「これ、何に聞くの？」

「……だから、貴方の変化にですよ。いや、今の破壊ですかね……」

……破壊……

「……そう……あの、私よく考えたんだけど……」

「勿論、貴方の人生です。貴方に選択権があります。ただ……私はハッピーエンドで計算しました。ソコだけは忘れないでください。」

「ええ、そこは信じてるは。……ただ、ただね……」

「世の中諸行無常ツスよ、変わらん物なんて多分無いと思います、いや、でも在るのかもしれないけど、きつとそれは抽象的なものだと思います。だからいつかは変わります、この生活だって変わります。」

で、俺達破壊屋はその変化を自然から人工的にやるのが仕事なわけです。……えーとだからあの……」

何か長たらしい事言ってるけどコレ誰かのマネね……本人も理解していないもの……

「ま、だから、怖がっててもいつか変わる“今”が来ます、それは何処に行くか分からない奴ですが、それを待つか、それとも決まっているハッピーエンドに行くか……」

なんかこんなシーンの映画見たわ、弾丸がスローになってブリッジになった人がソレをよける奴、キアヌ・リー……とそんな事はどうでもいいわ。

今、鞆君の左手には漢方薬（？）が、右手は……何かしら？握っていて見えないわ。

まあ両手を突き出しているわけ。

どちらかを選べって事ね……

……私は冒険者にはなりたくない。わよね？いや、今更って言われたら、反論は無いけど…見える物がハッピールエンドなら私はそっちを選ぶ！！

「貴方の今を破壊します。」
「勒君がそう呟いた」

破く1・後く懷

それから毎晩、私と夫は漢方薬（？）を飲んだ、不思議な事に私はダルさや疲れをあまり感じなくなつた、それは夫も同じようで、朝も私より早く起きれるし、夜は夜で……元気だ。

ただどなにも変化らしい変化はないわね……

確かに身体や精神的にはスツゴク余裕ができたんだけど……
毎日の生活では変化は無かつたわ。

それから、私は変化を期待して夫（夫は破壊屋の事は知らないわよ、だつて話すの大変じゃない……）と漢方薬を飲みつづけたの、……で、もうそろそろ三ヶ月たつかな……

ふー、変だわ、身体がダルい、食欲が、無い

何故かしら……身体の調子が悪いわね、しかもここ最近……

夫は調子いいから、漢方薬は関係無いと思うんだけど、うう、気持ち悪い……

「ただいまー」

夫のお帰りだ

「お帰りなさい……」

声を出すと、なんか表現しにくい、胃袋の混沌が溢れ出しそう……
「どうした？なんか体調悪そうだぞ？」

「ええ、ちょっと、いやかなり気持ちわるいわ」

「わ、分かつた、今日は俺がやるから休んで、な？」

「あ、ありがとう…」

夫が優しくて良かったわ…

「ほら、オカユ、少しは食べないと、悪くなるだくだぞ？」

夫といつもどつりのリビングでテレビを見ながら食事、けど少しの変化で私はとても幸せ……って、待つてよ？

『貴方の今を破壊します』

ふいに蘇る勅君の声：おかしい、私はハッピーエンドを選択したのに
いや、おかしくは無い、今私は幸せを確かに感じた…って事はこれが結果なの！？

『破壊できるのは貴方の物だけです』
私のつて…私の体調を！？

「い、おい大丈夫か？」

夫の声で我に帰る。

「ね、ねえ、アナタ…体調悪くない？」

震えが止まらない

「いや、むしろ、絶好調だが？」

『貴方人生ゲーム得意？』

『いや、気付いたら借金まみれで』

やっぱり人選ミスだったの？

『身体にダルさ、食欲不信、さらに色々と不安がよぎる女性の貴方…』

テレビで、「なんとか家庭の医学」がやっている、今の状況はまるで私じゃない……

そして、告げられる。名前が長すぎて覚えられない、病気……

そのテレビの女性は病院で家族に看病されながら、病氣と戦っている。

いや、よ、こんな変化は…イヤ!!

…昔風邪をひいた時は健康だった時が羨ましく思えた。

『今幸せそうにみえますが』

ああ、やっぱり欲張りはこういう結末なのね…「お、オイ!大丈夫か!？」

私は台所で胃袋の中身を吐き出した……中身って言っても私今日あんまり食べてないのよね……だから液体って言った方がいいかも……

「アナタ、恐いの、助けて…」

不安で不安で本当に怖い。

夫が何かしてるけど、今私は夫に抱きしめられて、夫の胸しか見えない……懐かしいわね、この二オイ

「大丈夫だからな、もうすこし頑張ってくれ。」

夫は相当オロオロしている、周りからみたら

「なんだよ嘔吐ぐらいで」とか聞こえそうだが、私が嘔吐したのはかれこれ17年振りくらいだ、夫は私に健康って考えてるから。

きつと安全神話が壊れたみたいなの慌てかたなんでしょうね…

《…ポー………ピー》

アレ?何か聞こえるわ?

「大丈夫だ、今救急車きたからな!」

つて、ええええええ!?

大事になつてるー!?!?

くっ…抗議したいけどまた吐きそう…

夫に玄関に連れて行かれて、次は救急隊員に救急車に乗せられて、救急車で病院に運ばれる。

私はバトンかつ！？

良かった、突っ込む気力は残ってる

今、私は病室にいる、医者が私と夫に告げたのは

「ええ、大丈夫です、妊娠ですから。」いわゆるオメデタ宣言だ……

夫は私を抱きしめ喜んでくれた。

うん、我が家には子供がいなかったから……

夫は今日の仕事を休んで、私と一緒にいてくれた、って言うても、親戚への連絡で忙しそうだったが…

「じゃあ、本当に行くけど、大丈夫か？」

「ええ、仕事2日も休むわけには行かないでしょ？」

私は昨日あらかた検査を終えたので家に帰ってきていた。

夫は私の事が心配で仕事を休むとか言ってるけど、私はもう全然平気だったので夫を仕事に送り出した

そして、私は私で友達やら何やらにオメデタを伝えていた
そんな時…

ピンポーン

玄関のチャイムになる…
誰かしら？

「はい、どちら様ですか？」

「こんにちはー破壊屋でーす」
どうやら御登場のようだ。

「オメデタおめでとうございます。」
今回の黒幕である靱君が…

「どうぞ、上がって下さい」
さて、聞き出しますか。ハッピーエンドプランを、初めからこれが
狙いだっただかを…

「お邪魔します。」
靱君が靴を揃えて、リビングにやってくる

テーブルに座ると、今回で三回目だこの体制…

「ねえ…初めからこれが狙いだっただの？」
私から口火をきった。

「ええ、家族構成子供無し…って所で、これにしようと考えてまし
た。見たところ財政力は有りそうですし…」

「まあね、確かにそうだけど、なんか…もっと恐い結果になると思

つてたのよね、私は……」

「まあ破壊なんて言葉聞いて、こんな結果誰も予想しないでしよう？」

「そうね、破壊ですもんね」

「ええ破壊です、ただ……俺もいまいち理解出来てないんですが、破壊は創造でもある、だそうです、生と死が同質で切れない関係であるのと同じように、破壊があつて創造があるんですよ。」

「……確かに今の私なら理解出来る、今までの日常を破壊し新たな日常へ破壊と創造がセットになつてゐるわね。」

「まあ、アレですね、初めて会つた時に言いましたけど、同じ“今”は無いんですよ。今この体制はかれこれ三回目ですが、一回たりとも、同じ状態は無かつたはずですよ。」

確かに一回も無かつたわね。

「変化は常に起こるものです、ただ日常ではそれは本当に些細な事で気付かない事が多いわけです。そこで俺はとびきりな変化を与えたわけですよ、ソレがオメデタつてわけです。」

「なるほどね」

確かにその通りかもしれない。

日常において変化なんて気づく事も少ないしよほど顕著じゃないと分からない。

「ねえ…一つ聞いていい？」

ただ…私は気になって仕方がない、これが全て計算されていたことなら。

「なんでこんなにカンポー余るの？」

そう、漢方薬が結構余っているのだ。

「…い、や、あの、妊娠って俺よく分かんないですよ、ハイ。計算の仕方とか、女の子に聞いたら、何か思いつきりぶたれて……」

「なんで、私に聞かなかったの？私の事は一番私が分かるじゃない？」

鞠君は胸をはって答えた

「いや、言ったでしょ？サプライズがあつてこそ、冒険だ、って。」

「いや、そうだけど……」

「いやー、何かその聞いた子最近話してくれないんですよ、俺と…何か、一回、パパ…とかふざけた感じで呼んできたんですけど、なんででしょう？」

「あなた、サプライズと引き替えに何か大切なもの無くしたわね」

「……………マジですか？」

この子そこんとこ抜けてんのね。

「さて、じゃあ代金はこっちの宛先に送って下さい。」

鞠君は住所が書かれた紙を渡してきた。

「え？振り込みじゃないの？」

「ええ、まあ色々あるんです。」

ま、何かわけ有りな感じだから従っておこう。

「よし、じゃあ俺はそろそろおいとましますね、あつ代金ちゃんと送って下さいよ。じゃないと大変な事しますよ?」

「え?何するの?」

なんかヤバそうなんで一応聞いておいたほうがいいわね。

「いたいけな17才を家に連れ込み、悪戯した。…とか」

「イヤね、それは…」

最近、近所のおばさんが鞆君の事見たみたいで、あの子誰?とか聞いてきたとき、

「あつ甥っ子です」と答えておいた事は秘密ね。

「ハハ、大丈夫ちゃんとしてくれれば、それでいいですから。…ふーなかなかいいオチで良かった。」

鞆君が安堵と共に言い出した

「ダジャレ落ちって結構難しいんですよ」「え?」

何の事だろ?本当に覚えが無い。

「いや、ゴカイニンって。」

鞆君はへらつと笑って言った。

よくわからないので笑顔でごまかす

「ねえ、また遊び来てくれる?」

私は出来る事ならこの子とは友達になりたいと思った

「いや、無理ですね。俺達破壊屋は物事の変化の起点、カオス的な存在ですから…、しょっちゅう会っわけにはいかないんですよ。だからこれで、お別れですね」

残念だ。なかなかの逸材なのに…

「そつ、じゃあ、お別れね。」

「ええ、お体気をつけて、あの漢方薬は妊婦さんも平気らしいですから、気持ちが悪くなったらどうぞ。」

「ありがとうね。」

「いえ、じゃあ俺はこれで。」

靱君はヒラヒラ手を振って去って行った

今、私は考えている、靱君が言った。
ダジャレ落ちって……ゴカイニン？
ってご懐妊のことよね？

えっと、待ってよ彼は破壊屋って……あ。

後日談

いやー気持ちいいかんじに終わったねー

ダジャレ落ちって俺も上手くやったなオイ。

「ただいまー」

「破壊屋〱アナタの願いぶち壊します〱」

という、絶対に人来ねえ！！という看板の店に鞠は入っていく。

店は裏路にあり築100年は軽く言ってそうなボロ屋だ。二階だてだが、かえってそれが危なく見える。

中は駄菓子屋みたくなっていて、一段上がって奥にいける

……で、その奥に行くための扉に

「お帰りー」

店長の霧川さんいて迎えてくれた。

身長170cm肩まで届く綺麗な黒髪、出るとこ出てるベッピンさん。そう見た目は綺麗なお姉ちゃんなんだけど、

「霧川さん家の看板取り替えません？絶対人来ないですって。」

ネーミングセンスがアレな人だ

「うるせえよ、鞠、おめえさんもアレ書く時反対しなかっただろ？」

しかもネーミングセンスの話になると怒る。

理不尽極まりない。

「すみません、俺が悪かったです。」

謝れば、すぐに許してくれるから、別にいいんだ

「いや、今日は許さない。」

な、なんですとお！！？

「なぜですか！？何か機嫌が悪い事でもあったんですか！？」

俺は知っている、この人が怒るととてもなく、ひどい目に会う事をしかもそれは、十代後半の俺にとっては致命的な嫌がらせになる事も。「黒岩とリンにも言われたからだ、いくら私でも三回目は無い！！」

ヤツアタリだとオ！！理不尽どころの騒ぎじゃねえ！

「え？つまり俺はタイミングが悪かったんですか？」

外は日暮れなんだが、ここは裏路地光は届かない……つまり辺りは真っ暗だ。

蛍光灯の光をつけるリン。

コイツ黙ってりやあ可愛いのに

「お帰り、不幸な発情不細工猫。もう帰ってこなきゃ良かったのに」
「チョーが、（もう死語だが敢えて使おう）チョーが付くほどの毒舌だ。」

そして、俺が子供の作り方について聞いた子だ、いや、作り方は知ってるが、アレだ計算方法とかがわからなくて。

それ以来なんか毒舌が猛毒になった気がする。

「お前のせいで今俺がピンチなんだよ！」

「人のせいにするなよジンちゃん？あ？なに怖がってんだよー可愛いなオイ？」

霧川さん恐いです

「霧川さん、なんかこの前ジンが霧川さんはいいい姉ちゃんなんだ

けど、性格はダメダメだなとかホザイテターヨ。」

もうリン、最後は適当に言っただけです。

「後よろしく、みたいなオーラが伝わってきます。」

「なに、どういう事かなジンちゃん？話が読めないんだが…」

霧川さんスツゴク嬉しそうに笑ってるけど、俺の頭に置いた手が…

…手が…痛いーイー

「痛がってるの？どうしたジン君？」

「いや、別になんでもありません。仕事終わって疲れてるんです。」

痩せ我慢って疲れるよね

「仕事、そういや、上手くいった？仕事は？」

手の力を抜いて霧川は尋ねた。

「ええ、上手く行きました。ダジャレ落ちでまとめました。」

「ダジャレ？」

「ええ、ダジャレです。」

ここは胸をはっていいだろう。キレイにまとまったんだから。

「ふーん、どんなの？」

「いや、破壊屋とゴカイニンをかけた奴です。」

「ゴカイニン？」

ありや？霧川さんも分かってないのか？

「いや、靱君、お前、ゴカイニンって漢字で書いてみるよ？」

「え？ご壊妊でしょ？」

と俺は霧川さんが何が言いたいのかわからないが紙に“ご壊妊”と書いた

「靱これ」

霧川さんは携帯を俺に渡した。
その画面には“ご懐妊”の文字……っあ。

後日お金と共に

「まだ家の子使わないから」と、電子辞書が送られてきたという。

破く2・前く壊（前書き）

今回は三部作です

破く2・前く壊

はじめまして、私は破壊屋に勤めているリンと言います。
今日のお客様は私が対応する事になっているみたいです。

はー…マジダルいです。仕事なんてあの馬鹿犬見たいな靱にやりや
せりやいいじゃないですか？

ま、やると決めたらやりますけどね、私はそんなだらしのない女じゃ
ないんですよ？

さて、今日のお客様は、と？

「わー、アッチ行つたぞ！」

「追えー、捕まえた奴一等なー！」

「ハハハ、捕まえたぞー」

「よし殴れー！」

「やったね！」

言わなくとも伝わったと思うんですけど、これ10年くらい前のイ
ジメ方です、この時は逃げて捕まって、殴れて。本当にワンパター
ンでした。いや、僕はその時代の人じゃないんで分からないんです
けど、きっとそうだったんだと思います。

今僕は小学生です。5年生です。

そして、イジメられっ子です。

いや、もうこんな軽い言い方じゃ割に合わないくらいのイジメられ
っ子です

こんな考え方したくないんですが、どうせイジメられるなら、10年前が良かったと思います。

「はー」

学校に行くと考えただけでため息がでます。

「いつてきまーす。」だけど、お母さんお父さんには、知られたくないので笑顔で学校に行きます。

………疲れます。

「いつてらっしゃーい」

親には何も心配かけたくないし、悲しい顔をさせたくない。

それが、今の僕にできる唯一の事だと思うから、今日も学校に行きます。

小学校つと言っても私立の小、中、高、一貫性で、エスカレーター式の学校です

ただ、生徒の数が半端無いんです、マンモス校なんですだから、先生は僕の名前覚えてるかな？

ま、いいか、どうせ何もしてくれないし、頼る分けにもいかないだろっし

朝の学校は太陽がサンサンと降り注ぎ凄くキレイです。

みんな、笑顔で挨拶してます。上履きを履いて3階の教室へ。
え？上履きに何か仕込まれてないか？って？そんなバレる事しませ
んって、今は以下にバレずに、イジメるか…がイジメのセオリーな

んですよ。

だから、僕も集団で殴ったりそんな顕著な暴力はされません。つまりは精神的な暴力です。

まず、挨拶などは誰もしてくれません。

そして、授業中にみんなで僕に注目させたり、無言ですれ違いざまにこっそり暴力とか、つまりは陰湿極まり無いイジメです

ぶっちゃけもう嫌です。

「先生ー田口君が携帯いじってます」

クラスの女子が平気で嘘をつく。

いつか絶対に本気でぶん殴ってやる！！

これで今日30回目の誓いです。

「田口またか、お前、一時間目には、男子にセクハラしたらしいな？」

男子？！先生アナタ本気ですか！？

いくら僕でも堪忍袋がキレルよ？？

しかも、少しは疑えよ！！先生あんたはアホか！！

くそー！！絶対に親にだけはバレないようにキレルわけにはいかないし……キレた所で僕は身長ちっちゃいし、武術なんてやった事無いし……勝目はないし、耐えろー耐えるんだ、僕。

昼休み、弁当はいつも女の子が僕の周りを囲み（ちゃんと席2席は開いて半径5mは絶対離れてる。）

いわゆる籠城攻めだ。しかもやたらと大声でキモイとかウザイとか聞こえてくる。それにしてもなんなんだ、一体僕が何をしたいのうのだ。

どうしてこうなったんだろう。

席もたてない

勿論、トイレにも行けない。
いつか膀胱炎になるかも…

本当にいつからなんだろう…こんな事になったのは……

ガンッ!!

机を思いつき蹴る音……

ああ、思い出した、こいつ、が元凶だ……

僕をイジメだしたこのクラスのリーダー格

コイツ、には誰も逆らえない

女子でも男子でも

コイツを敵に回したらこのクラスにはいられない。
いや、この学年にはいられない。

名前は……大原 亮

僕が何回、コイツの名前と“死ね”とノートに書き連ねた事だろうか？

その数およそ、6冊

いやーよく頑張った、僕の右手

「や…ごめん、見てなかった。いや見たくなかった。」

笑顔でサラッと言いやる。

「何？俺に何かついてる？どうしたそんな反抗的な目えして……」
イヤなぐらいキレイでカッコイイ大原の顔が近づいてくる…

……………ゴッ！

「うつー！」

お腹に大原の膝がある、さっき机を蹴ったのはこのためか……

苦しい、さっき食べた物が出てきそう……

「ご、めん…なさ、い」

これは僕にとっては魔法の言葉だ。

襲ってくる黒い塊から身を守るための魔法。

「なんだ、最初からそういえよ？ついに言葉も出なくなったのかと思った。」

周りから聞こえる、嘲笑う声。

……………くっそ、くっそ！クッソ！！

「なくなっちまえ、こんな学校。」

誰にも聞こえ無いように呟く僕…ささやかだが、僕ができる最大限の抵抗。……………情けない……

帰り道…疲れきった僕、今日は特に食後の膝がきいて痛みと情けなさで放課後トイレですっと泣いてた…

今何時なんだろう。

真っ暗な道、街灯が照らす一本道。

周りに人はいない

それから僕は考えるんだ。

僕が笑顔で家に帰るため。

今日も楽しかったと言えるための想像を。

でも、なんだろう、今日は楽しい事が想像出来ない…

大原の顔を殴る事しか想像できない。

「イヤだよ、こんなの楽しくない、……壊れちゃえ」

家に帰れないじゃないか

涙が止まらないじゃないか。

「壊れろーーーーー!!!!!!」

気付いたら叫んでた、自分でもビックリするくらいな大声で叫んでた。

「うるさい。」

え？

ふいに何処からか、声がした。

え？つてここ何処！？見たこと無い道だ、光もほとんど無い、真っ暗に限りなく近い道

地面はなんか濡れてるのかな？

少し黒い……

風邪が吹いてきたけど、なんか、臭い…

「どうしたの？」

まだだ、今度はもつと近くで声がした、近づく音したかな？

………カツ………

今、音がしたな

「こつちよ」

やばい！！背中が刺さった

すぐに後ろにいる！！

どうやって近づいてきたんだ？？

足あるのかな？？

「大丈夫、怖がらないでいいよ。」

後ろで声がする。

危害を加えてくる気は無いみたい、しかも女の子の声だし

大丈夫だよな？

うん、行ける！！

何がいけるのか分からないけど、僕は思いっきり振り返ったんだ。

身長は168cmくらいかな？

黒髪の可愛いお姉さんって感じの人だ。

そのお姉さんは僕を見て口を開いた

「お前、ひどい顔だねー」

凄いキレイな笑顔だった。

そして、僕はまた涙が溢れだしたんだ

しばらく、泣きつづけた、15分くらい後引いてたし、なんか泣き疲れて僕眠くなって来ちゃったもん。

「落ち着いた？」

ここは、すぐそばにあった公園、茂みから虫の声が聞こえてくる。

もう6月だしなー

早く夏休みこないかな……

「うん、大丈夫」

夜の公園、ブランコに座っている僕と女の子……マセた下心が浮かんでこないのは、第一印象が最悪だったからだろう。

しばらく沈黙が続いてた……

「ねえ、君」

ビクッと身体が震えた……条件反射かな？

「壊れるーって叫んだよね、さつき、それは何を壊したいの？」
お姉さん顔が本気だ、なんか、話してもいいんじゃないか？って感じになってくる顔だ……

「……僕の想像を……」

…僕は話す事にした、この見ず知らずのお姉さんに…
きっと親には伝わらない、って思ったし。

「想像？どんな奴？」

「…うん、嫌な奴の顔を殴ってる想像。」

話したら少しは楽になれそうな気がして。

「なんで？別に嫌な奴殴る想像なんて壊れなくてもいいじゃない？

え？なに、君まさかその年で偽善者やってるの？」

お姉さんは何か独りで盛り上がってる。

いい奴目ツけた！！

見たいな目で僕を見る。

「なに言ってるのか、よくわからないけど、そういうわけじゃないよ。」

話す度に大原の顔がうかんでくる

「じゃあ、どうして？」

「僕、お父さんとお母さんには心配かけたくないから、だから笑えるような、事考えて、想像しないと……」

お母さんの顔、お父さんの顔が浮かんできた。

喉がキュッって絞められて、鼻がジーンってする。
声が上手く出せない。周りが曇ってきたよ…

“ 帰りたい ” だけど今は帰れない。
こんな泣き顔、見せたくない。

「……………想像しないと？」
お姉さんは僕から目を離さない。

「嫌な事ばっか思い出して、泣いちゃうと、思っんだ。」

僕はきつとケンカもできないし、逆らえない、すんごく弱虫だと思う。

でも、それでも、僕は僕なりに守れる物があるから。

「…ふーん、だから壊れろーなんだ？」

「……………うん。」

お姉さんは何か考えてるみたいだ、遠くの方を見る

「君、もう少し、その話し聞かせてくれない？」

お姉さんはブランコから降りて、着いてこいと手を招く。

え？これって誘拐じゃないの？

「いや、僕もう帰らないと…」

「君、想像を変えたい？」

「う、うん」

「その想像を壊す手伝いを私がしてあげる。」

「え？」

空は星を讃えて、月が照らされている。

「アナタの想像だもの、壊す事は出来るわ、そうね、500円で引き受けて上げる。」

「本当に壊してくれるの？」

怪しい事は分かってる、危ない事も分かってる、それでも僕は壊したい。

家に帰るために、笑顔になるために

「ええ、粉々に……」

僕はお姉さんの手を掴んだ。

「壊して下さい」

お願いと共に。

「貴方の依頼引き受けました。」

お姉さんは頭をキレイに下げた

僕らは照らされた光に照らされて歩いてく

繋いだ手は家に繋がる命綱。

必死で掴む僕にお姉さんは

「大丈夫、そんな想像出来なくしてあげるから」と笑顔で応えた

あっ……やっぱりバイかも……

破く2・前く壊（後書き）

この話しのラストは強引です。そんなんじゃ、解決にならない。つと納得出来ない方も多々いらっしゃると思います。でも今回はこういう結果で終わらせて下さい。

どうしても、許せない。お前に何が分かると憤りを押さえられない方は、そうおっしゃって下さい。

そしてお手数ですが、こういう方法がベストだろ？っという、貴方なりの答えを下さい。

ダラダラと長文失礼しました。

破く2・中く壊

お姉さんに連れられて、僕は変な裏路地に入ってた。

下心なんて可愛い物は無くて、恐怖に身が震えてる。

「着いたよ。」

お姉さんがポツリと言った。

見上げると

「破壊屋くアナタの願いぶち壊しますく」

という看板……

今からでも逃げられるかな？

「ああ、大丈夫よ、名前がダメダメなだけだから、さ、どうぞ。
ガラガラと音をたてて扉が開いた。」

中は駄菓子屋？みたいな感じで、見たことないような、怪物のお
面や変な色の液体が棚に並んでる。

「霧川さーん！お客さん連れてきたー！」

お姉さんが一段上がった奥に声をかける

「…分かったー、今行くー」

返事が帰ってくる、女の人みたい。

「大丈夫、何もしないから、ね？」

そういつて、お姉さんは変な色がぐるぐるしてる飴玉をくれたアレ？なんかこれ、警戒色だよ？

「おう、リンお帰りー、そしていらっしや……」

綺麗な女の人が出てきた。あー魔女ってやっぱり美人が多いんだな
――

今僕をジーと見てる。

そして、首を傾げてリンさん？だっけ？まあここに連れてきたお姉さんに聞いた。

「これ、お客さん？」

「ええ、破壊したいのは嫌な奴を殴る想像だそうです。」

「……………どゆこと？」

「楽しい想像しないと家に笑顔で帰れないんだそうです。」

「……………イジメか」

奥から出てきた女の人には僕の頭をクシャクシャ撫でて。

「強い子だな」って言った。

何が強いんだろう？

僕は弱いからイジメられてるのに……

「分かった、リンしっかりやれよ。」

リンさんは笑顔で頷いてた

僕は奥に通されて、今、チャブダイって奴にリンさんと向かいあつて座ってる

そこで僕はあらいだらい全部の事を吐いた

小4までみんな仲良かった事

大原は頭もいいし顔もよく、ただなんか昔から浮いた所があった事
小5になってから急に大原が僕をイジメ出した事
周りの子はその流れに抵抗出来ずに一緒になってやってる事

……女子は大原の気を引くために我先にと率先してやってる事
などなどだ

「そう、大原君、ね？リーダー格は？」

「うん」

「用はその子がリーダーじゃなくなればいいわけだ……」

「え？う、うんそうなのかな？そうじゃない？」

「よし、やる事決まったし、コレ書いて」

リンさんは一枚の紙を出してきた

「契約書？」

そう書いてある。

いくつかの質問が書かれてる

・お名前

田口 雄介

・ご住所

-

・電話番号

-

・破壊したい理由

家に帰りたいから

・破壊したら元にはもとせませんがよろしいですか？

ハイ

・破壊後にクレームは受け付けません、よろしいですか？

ハイ

以上事をもちまして契約成立とみなします

「書きました」

「ん、よし。おーけー。さて、今は8時だ、君は迷子になって公園で寝ていた所を私に保護された。」

「……え？」

何を言い出したんだ？リンさんは？

「いや、言い訳だよ。破壊屋ーなんかなんて言ったら親に心配かけるだけだよ？イヤでしょ？」

「うん、イヤ」

「だからこの言い訳、いいね、私は通りすがりのお姉さんよ。」

「うん」

「よし、じゃあ帰ろう。」

リンさんに手をひかれて僕は家に帰った。

嫌な想像はなくなつて警戒色の飴玉は甘くて、美味しかった

お父さん、お母さんは心配してくれてた。

それでリンさんに何回も頭を下げてた
違うよお母さん、ソイツのせいだよ

お父さんはわざわざタクシーを呼んでリンさんを送っている
違うよお父さん、そいつ今心の中で大笑いだよ。

「じゃあ、なんか色々すみません、じゃあね雄介君、また今度ね。」

「う、うん」

リンさんは笑顔で帰って行った。

ふー

タバコ臭いタクシーの中、ため息をつく私がいま

やると決めたらやるそれが私だ。

だから、滅多に他人の事に手を出したりしない、なのに今回はどうも、浅薄だ。

あの子は放って置いちゃダメだ

自分の中の何かがそう叫んだんだ

まあ、イジメとか比較的潰しやすい仕事だから良かったけど、ハズレだったら大変だったな……

「お客さん、本当にココでいいの？」

運転手が聞いてきた、どうやらいつの間にか着いていたらしい。

暗い暗い路上裏への入り口。

絶対人こねえな……と今、つくづく思う。

「そ、いくら？」

お金は雄介の父さんがくれました。
猫被るのは得ね。

さて、面倒いけど協力頼みますか。

盗聴、盗撮、ピッキング、さらには只今ハッキングの勉強中である。
破壊屋の一員で、もっとも可愛い女の子

そして

もっともビビリな女の子

ユリちゃんに。

向かうは二階。

コンコン…

ドアをノック。

ドアには両方にウサギが描かれているネームプレートがついている。
そしてそこに「YURI」と書かれている。

はー

女の子してるなー

「はーい」

ここで普通に出るのは面白くない。

「あ、俺だけど、時間いいッスか？」

声色を靱風にして言ってみる。

「え、じジン君？」

おっ動揺してるな。

「えっちょッ…待ってて。わーどうしよう」

ハハハ、面白い。

「なんて、私でした。」

ドアを開ける。

そこにはパニクッてオロオロしてるユリがいた、いやー可愛いな。

「……………リンちゃん？」

「そっ、リンちゃんでしたー」

おっおっ、泣きそうな顔してるぞ。
相当ビビッてたな。

身長160cmの小柄で肉付きはいい感じ、胸も大きいし。
顔はうーん、可愛いねって言われてた子供がさらに可愛くなった感じ??

髪は肩まで伸びててアジアンビューティーって感じかな

いつみても抱き心地良さそう。

「冗談だよ、もう、ユリちゃん、そんな泣きそうな顔しちゃってー」
とか言いつつ抱きつく、うーわーマシユマロか?この子はマシユマ
ロなのか!?

「リ、リンさん、ちょっと、ね、ねえー」

この子イヤだとはハッキリ言えないのがまた可愛い。

「どうしたんですか?急に?」

なんかユリちゃん抵抗するの辞めて、座りこんじゃった。
もちろん私抱きついたままね。

「うーん、ユリちゃんの事抱きしめたくなくて。」

耳元で凄くイヤらしい感じに囁く。

おっ顔赤くなったぞ。

面白ーい!そして可愛い!さらに柔らかーい!

もう最高だね、ユリちゃんは。

なんでこんな可愛い子がジンなんて馬鹿犬に惚れちゃったかは一生
の謎ね……

しかもジン、霧川さんの“躰”で女性恐怖症だしね

ハ―報られないわよね。

この子のために破壊屋ってあるべきだと私は思うわ。

「うん実はね、盗聴機貸して欲しくて。」

「と、盗聴機ですか?」

「そ、今回の仕事そっち路線でいきたいんだ」

「いいですけど、盗聴機にも色々ありますよ?」

「うーんじゃあ壁越しにできるやつある?」

「ええ、ありますよ。あ、でもコレ送信型じゃないから、近くにいないといけない奴ですよ?」

「あーそっか、うんでもそれでいいや、貸してー」

「じゃあ一日40円でいいですよ?」

う、この子金銭面では相当しっかりしてるのよね。

霧川さん、家計の事全部ユリちゃんに計算させるからなー。

「うん、じゃあ、借りてくねー」

ユリちゃんの部屋を出ようとしたその時。

「あつ、リンさん。」

「ん?何?」

「ちゃんと分かってますよね?」

「ああ、大丈夫、ちゃんと使えるよ?」このタイプの盗聴機は何回かユリちゃんから借りてるし。

「いや、使い方じゃなくて、それを使う意味です。」

「え?」

「盗聴するというのは、つまり相手がもつとも安心出来る場所ではない存在しえない情報を、盗み、探るという事です、つまり相手の中に土足で入り込むわけです。その情報が不用意に広がったりしたのなら相手の居場所を無くす事にもなります。最悪、その人を一生孤独にしてみようかもしれません。」

なるほど、さすが優しい子だ、盗聴も盗撮も必要最低限な所だけ、後は聞かず見ざる言わざるついでに知らざるを通すわけだ。

まあ、盗撮、盗聴するにはかわりないんだけど、それでも相手の事を考えて行動する

ここが私とユリちゃんの違いよね。

「大丈夫、うまくやるよ」

だけど、その心配はいらないよユリちゃん。もう今回のターゲットは独りの居場所を無くし、帰る場所まで奪おうとしたんだから

情け無用

今度はあの子が居場所を無くす番なんだから。

な、なんとか、今日も学校をしのいだ僕がここにいます。

あの日からもう4日は経ちました、まあ、今まで耐えてこれたのに今更ブツン切れちゃう僕じゃないですよ。相変わらず大原には殺されかけてますが、家には笑顔で帰ってます。

ところで今、ホームルームが終わろうとしていますが、先生からの連絡事項の中に『最近不審な人物が目撃されている。なんでも凄い毒舌の持ち主らしく、それと色々と生徒の事について聞いてるらしい。』っていうのがあった

まさかね……

リンさん、アナタじゃないよね？

アレ？

毎日にイジメが沈圧化してきてます、女子の作った籠城攻めホームーションは最近ずいぶんとやつつけ仕事で、トイレに行けるようになりしました。

授業中の名指し攻撃、“アイツ見て見て”も一日五回から一日一回、しかも相当ソフトになってきています

「先生、田口君が寝てます。」
いや、これは僕が悪いのかな。

なにより一番の変わったのは、笑顔が自然と作れるようになった事です。

………楽しいです

「いつてきまーす」
も、楽に言えます。

でも、不思議です。

最近、皆が大原を避けてます、大原自体あんまり、動きません

これは、やっぱり……リンさんが絡んでるのかな？

何があつたのかな？

ずいぶん、暗いオーラが大原から出てます。

後日、聞いた話しただけど大原の両親離婚したらしい。

決め手になったのは、大原のお父さんの浮気がバレた事らしいです
後、こんなのも聞きました、大原の家に最近不審者がうろついているという事。

そして、大原のお母さんがその不審者とたまに接触してるという事。

実は離婚云々より、もう大原の家は崩れかけてて、その不審者は大原のお母さんの浮気相手なんじゃないか、っていう噂がながれてる事

なんだろう、どれもこれも、リンさんが頭に浮かぶのは、確信してるからなのかな？

人間面白いもので、他人の不幸はとことん楽しめるようだ。

僕も何回か、クラスの子達が大原の噂を口にしてるのを聞いた。

僕の立場は“同情に値すべき者”になって、優しく、クラスの奴が僕に話しかけてきている。

初めは作り笑顔で対応してたけど、今は普通に笑い合ってる。

友達に戻れた理由がキレイな理由じゃなくとも、また友達になれたんだから、僕はそれでいい。

高望みの精神は、イジメを通して無くなったみたいだ…
そこは、感謝すべきだろう。

帰り道、確かに想像は無くなったな。

普通の毎日。

殴らない、責められない、バカにされない、そんな普通

だけどそれ以上なにを望むというんだろ。

アレ？

リンさんだ。

こっちに手を振っている。

笑顔だ。

「リンお姉ちゃん。あの、これってお姉ちゃんがしてくれたんだよね？」

「うーん、ちょっとココで離すのはあれね」

…っと、近くにあった公園に連れていかれた
不思議と今はときめきたいな感じがある

前とは大違いだ。

「さて、と、じゃあ話してあげましょう、リンさんマジックを！」
リンさんはキレイに本当にキレイに笑って。話し始めた。

破く2・後く壊

カラスが鳴く。

オレンジの空の下、ずいぶん日が長くなった。

さて、雄介君を公園に連れてきたのはいいけど……

どう話そう……

今この子結構、厭世主義になってるとおもうのよね。

全部離すとなると、うーん、今後の教育によくないかな？

私は、盗聴機を借りて大原君の家に仕掛けたの
合計7個。

後、電話回線も電柱を少しいじったし、近くに駐車場があったから
そこにワゴン車止めて、よし、電波範囲内。え？免許？持っていない
よ？

車？え？道端に落ちてるじゃない。

もちろんナンバープレートは変えたけどね。

さて、プライバシーも人権もどうでもいいの。

私が狙うのは大原 亮宅の家庭内崩壊。

居場所を奪った者には同じ苦しみを。

世の中、等価交換が原則でしょ？

（車泥棒？大丈夫、これ、政治家の家から盗ったから）

ま、そこから考えれば、破壊＝創造ってのも頷けるわね。

さてさて、お仕事しますかー

今、私が調べて分かってる事は、大原宅は以外と裕福な家庭みたいね。

閑静な住宅街に、立派な一戸建て、庭付き、で、亮ちゅんはずーと、甘やかされてみたい。

まー、そこはいいとして、問題がおきたのは、小4の半ばくらいね親父さんとお袋さんの仲が覚めきって、なんとか亮君のおかげで夫婦保ってみたい。

イジメは…ま、今までの反動だろうね。自分が今まで望んだ物はあらかた、買って貰ってただろうし。わがままに育ってきたんだろう

な・の・に、今自分が一番望む環境が手に入らなくなった

それで（まあなんで雄介がターゲットになったかは知らんが……）いじめたってところね…

両親の情報は

親父さんは、医者やってるんだって。

お袋さんは、専業主婦ね、ただ昔は大手の企業のバリバリのキャリアアウーマンだったみたい。

今は暇を持て余した危ない人妻つてとこみたい、夫も子どももない時間帯に、何回も電話があつた、セールスとか、そんな堅苦しい電話じゃなくて、危険な香りがプンプンする電話。

……いや甘いニオイって言つた方がいいか……

しかも、特定じゃなくて、多数ね。

実際に張つて見たけど、若い男ね。

フリーターって感じのいかにも、性欲なら自信ありますって感じ。

まあ、奥様の方はだいたいこんな感じね。

さて、殿方は……と………コイツ大物ね。

職場は市内でも大きな病院。

あちゃー、ありや看護婦と出来てるわ……

なんかスキンシップがいやらしい……もうイタリア人もビックリね……

し・か・も、堂々とその看護婦とホテルイン、いや、お城イン。

何診察してるのやら………つと、失敬

写真も撮りまくつたし、証拠充分

いや、小道具充分か……あとはドロドロの昼ドラ突入よ！

まずは、奥様宛にご主人のベストショット（お城イン）を送付。

もちろん差出人不明でね。

………で、無言電話を奥様に、ご主人がでたら、

「あつ俺ですけど、また会えます？」

もちろんボイスチェンジャーの設定は男。

さて、ご家庭はいまピシピシね、いやー、盗聴機がたくさんあると、

人間の裏がたくさん見えるね。

奥様は、写真の事を聞き出せず、疑心暗鬼。
殿方は、謎の電話で疑心暗鬼。

もういつちよう追い詰めますか……

私は敢えて目立つ毒舌で大原の小学校の周りをウロウロ、不審者情報は連絡網で流れて……そこで、今度は大原宅の周りをウロウロ。
心当たりがある奥様、最近電話番号変えましたね？

アハハ、何人も家に連れ込んでおいて

もう、遅い。

さらに、亮ちゃんが雄介をイジメてるところを撮影。

だめだよ？

ちゃんとカーテンくらい閉めなくちゃ？
他にも良からぬ事してる亮ちゃんを撮影！

おっと、家庭内やバイわねー

奥様ビクビク

へへ、こんな家庭じゃまともな子供は育たないわね

同情？悪いけど私はしないわよ。《こんな家庭で育ったから》とか、そんなのただの甘えじゃない、ましてや、こんな裕福な環境で……子供が無力だと思いで？

自分に不相応な事も、しっかりやってる子だっている、蹴られても、イジメられても、甘えたくても、涙さえ、全部押し殺して、笑顔を作りつつけてた。
子供だっている

そんな事ができる子供を無力だと言える？

言えないわ。

亮は変えようと思ったなら、きっと変えられたでしょう。
だってあの家庭、亮で繋がってるんだから
なのに、何もしなかった。

選んだ方法は、傍観。今まで散々、わがまましてきたみたいなのに、
肝心な所で望め無かったのね。

…確かに、見方を変えれば、可哀想な子、非力な子と見れるけど

何にも出来ない自分を恥じず、人に当たったその精神は、私にとっ
ては充分破壊目標。

言っただしょ？

私やる事とはことんやるの。

雄介があんな想像できないように、元凶を粉碎するのみ。

ショータイム！！

旦那様には悪いけど朝仕事に向かう時財布をすらせて貰ったわ。

そしてこの中に、あの看護婦さんの携帯番号と《いつでも、電話し

て」とピンクでカワイイ感じに書いた紙をわざと抜きやすい状態で大原宅に届ける。アハハ、奥様こんにちは！

旦那さんの方には、明日奥様のパパラッチを送って完成ね。

ま、今日事態が動けば、それでいいけど。

さてさて…ダッシュでワゴンへ！朝の風が気持ちいい！

電話盗聴開始！！

トゥルルル…トゥルル…カチャツ

「はい、もしもし？」修羅場開始じゃあー

「あの、わたし、大原の妻ですが、主人とはどういう関係なんですか？」

「え???うそ、ヤだ! どうした？」

奥さんからかかって来たの！

ええ!??」

オイオイ、しかもばつちり一緒かよー最高ねこの展開！

「貴方!?!いまそこに居るのね!?!どいう事なのよ!?!貴方!?!」
「ちよつと!?!どいうするの?!」

い、いや、どいうしよう?

どいうしようって先生…」

アハハ、マジ旦那情けなーい。

「ふーはじめまして、大原さん？私旦那さんの愛人です」

キッターーーーー

強気な女！！

「な！？何を堂々と！！この泥棒！！」

うわっ生泥棒初めて聞いたー！！

「よく言っわよ、貴方だつて浮気してるんでしょ？」

「え？」

「自宅にかかってくる若い男からの電話：次はいつ会える？…つてしかも、それ出会い系でしょ、かかってくる男の声みんな違つてたつて言うじゃない？」

お、オイ

先生は黙つてて！」

ハイ、ソイツは私です。毎回声変えてました。反省！

「そ、それは…」

「貴方、最近、愛のあるSEXしてる？貴方のやつてる事つてただの穴埋めじゃない？旦那さんに愛されたいのに愛されないだから、その行為だけで、穴埋める。ま、そんなんで穴が埋まらないから何人もの人とヤッちゃうんでしょうけど…」

スッゲーこの看護婦スッゲー

「わ、私は……」

「ごめんなさい、貴方の旦那私を愛してるの。」

決まりました！！ストレートです！！おっと奥様立てません、ダウンかダウンかー！！！！

「今晚、御自宅にお邪魔するわ、三人で話し合いましょう」
ガチャン……ツーツー

カンカンカン！！

KOです！！奥様立てません！！

いやー見事なまでに畳み込む看護婦ねー！
なんか聞いててサッパリしちゃった！

奥様パパラッチは必要なくなったわね……いや、コレはコレで利用可能ね

でも、ま、充分火は起こしたし……クライマックスといきますか。

P M 8 : 0 0

うつわードキドキするー

今どうやら、リビングのテーブルに大原の奥様、旦那さん、そして看護婦の三人が座っている。

クッソーという形で座ってるのか見たい、盗撮も借りれば良かった……

亮ちゃんはお部屋に避難してるわね……

エヘッ、ごめんね。

もう学校には君の家の家庭内状況は伝えておいたんだ。（もちろん、噂を流してね）

君には肝心なことを望まなかった事を悔いてもらう。

そして、自分の非力さを自覚してもらう。

もしコレがきたなら君は優しくなれる。

本当の望み方ができるようになる。

もし、コレが出来ないなら、ま、仕方ない、あの学校から君を追いつ出そう

この状況で一番熱が上がった時に、君がやっていた悪行を電話で全部バラすね？

イジメ以外にも落書きとか、万引きとか色々やってたね

全部写真に撮ったから

例えこの状態を大原家が乗り切ったとしても、亮くん、君のやってきた行動で、多分潰れるね。ま、そしたらまた悔いてくれ。

.....熱が上がる所って.....何処がピークか
分からないんですけど.....

ここは覚めたここにいくしかないわね。

P M 8 : 4 5

戦績...

奥様、0ポイント

看護婦、100ポイント

ま、こうなるだろうとは思ってたけどね。

そろそろチェックメイしますか。

携帯で大原宅に電話をかける...

ま、直ぐには出ないだろうし、気長に待ちますか...

ふっと空を見ると暗くて、星一つ見えない。

周りには街灯があつて明るく見えてるけど、きつと、この街灯のせいで、星は見えないんだろう。

トゥルル…トゥルル…カチャ…

「ハイ？大原ですが」

おつ奥様の声だな、ボイスチェンジャーも装備して…よし。決めますか！

「あ、もしもし、夜分遅くに失礼します。

私、亮君の学年の主任の者ですが、今お時間よろしいですか？」

「え？ええ…と」

奥さん戸惑つてるな

「こちらで電話で失礼かと思つたんですが、事態が事態なので…」
「…と、言いますと？」

「いえ、今日私どもの机に何枚かの写真が送られて来まして。その内容がですね、亮君の非行行為なんです。」

「えっ！、…ぐ、具体的にはどんな？」

「万引き、暴力、落書き。などです。」

「そ、そんな…」

「あつ大原さんFAX有りますよね？今から送ります…」

「え？」

もうFAX番号は調べてあるの。

車に置いてある小型FAXに写真を入れてと、（勿論電柱いじったわよ。）

GO!

「え？いや、何コレちょッ、ちよつと！！」奥さん必死だな。

「私は、確かにこれで警告と、事態のご説明はしましたから。何かクレームがあったらどうぞ、学年主任のハゼモトまで…」

……ピッ……

よし、これでいいだろ。ハゼモトなんて名字そうそういるもんじゃないし、大丈夫かな。

後は…事の成り行きにまかせますか………

はい、で、今にいたります。

雄介には

「うーん、何かやろうとしたら、大原さん所が離婚しちゃって、あとは成り行きまかせねー、運も実力の内ってわけ、凄いマジックでしょーー」と、適当な事を言っておくことにした

雄介の話によると、大原はスッゴク落ち込んでるらしい。
そりゃそうよね。だってあの後、ヒステリックマダムが亮をリビングに連れてきて、夢の四者面談ですもん。

……もし彼に反省と後悔する知能が無かったら、学校にいらなくしてやるうと思ってたんだけど。ま、この分だと大丈夫かな…？

「じゃあ、もうイジメは無くなったのね？」「うん、友達も戻ってきたよ」

ふー、大丈夫そうねこれで。

あの奥さんに送り付けた写真の中には、亮が雄介を蹴っている写真はいれなかったし、雄介がこの件に関わってるなんて、夢にも思わないだろう。

「あつ、お姉ちゃん、コレ…」
雄介は500円を私に渡した。

「500円でいいんだよね？」

「うん、500円よ。……………ねえ、もし、大原がなんかまたしてきたら…」

「大丈夫だよ、僕今の生活を守りたいもん。だから、大丈夫。」

そうだった、この子は自分が守りたいと思ったものは、守り通そうとする子だ、なんか、今回、私少し破壊しすぎたわね。

想像を無くすつもりが…でも、こんなオーバーワークなら悪くはないか…

「そ、なら大丈夫ね。あ、後、大原なんだけど……」

「う、ん。まだ僕はアイツの事が嫌いだけど、あのままずっと独りでいるなら、許してあげようと思ってる」

「え…？」

「やっぱり、独りは寂しいから。僕もイヤだったもん」

ああ、この子は優しくなれたのね。

夕日で笑顔がキレイに見える

「お前…カッコイイな！」

髪を手でクシャクシャにしてやった。

「さて、じゃあ私は帰るね、って言っても、もう会えないけどね。」

「……………そうなんだ……」

うん、それが破壊屋だからね。

こればかりは、仕方がない

「じゃあね。」

とお別れを言う雄介、目がうるんです。

「うん、バイバイ」

私はそう言っただけで雄介の額にキスをした、何故って？不覚にもカワイイな…って思ったからよ。

でも、コイツちっちゃいから、わたしが腰曲げなきゃならなかった

雄介のポカーンとした姿に一笑し、私は踵を返した

帰り道

雄介のポケットに、いつかの飴玉の袋が入ってた

「やっぱり甘かったな」

雄介が出した言葉は、夏の風に乗って淡い空へと消えていった。

後日談

「ただいまー」

「お帰りー」霧川さんが返事をかえしてくる

「あつ、霧川さん…コレ今回の分です。」

私はポッケからお札を渡す。

「……………え？どうした？コレ？」

その数、10枚、計10万だ。

「こんな大金子供が持つてゐるわけないし…誰から？」

「ま、アレです。経済的に裕福なマダムから徴収しました。」

そう、大原の奥様からだ、あの家庭離婚したらしいが、子供は奥様が引き取る事になったらしい。もちろん養育費はたんまりだ。

しかも、この奥さん、以前男とあつてた時にその男に“謝礼”を払つてた。

だから私は、手紙にこう書いたんだ。

「貴方の御趣味拝見しました。
写真を同封します。」

ネガを買つてくれませんか？15万円でいいです。
下手な動きをするとこの写真ばらまきます。払ってくれば、何も
しませんし、ちゃんとネガは消します

ただ、私の方で一枚お気に入りネガがありまして、奥さんキレイに写ってますよ？

これはもし今度、貴方が若い殿方をお宅に連れこんだ時に、バラマキましよう。

これは、嫉妬です。貴方をいつも見ています。

貴方を愛する者より」

ストーカー風味に仕上げてみました！

効果は抜群で、私の懐もホカホカ…さらに、これで奥さんも変わるだろうし。

めでたしめでたし。

あれ？？コレなんだろう？

ポケットに黒いアンテナが着いた機械が入ってた

あっ、盗聴機の受信機だ…さっき盗聴機全部ユリちゃんに返したけど、受信機返し忘れてた。

意味も無く電波を受信してみる。

《今日も疲れたー》

うつそ！？電波入った！！

《霧川さんにパシラれて、隣町まで買い物行かされたし、なにが安いから！だよ、電車賃で俺赤字じゃん！》

あつ、これ靱だ…

ユリちゃん……

私は恋は人を変えらるという事を知りました。

破 3・前 壊（前書き）

マシネリ、イジメとやってきたわけですが、今回は、“臭い”です
2つ以上の意味で臭いです

破く3・前く壊

はじめまして、俺の名前は黒岩、破壊屋で一番まともな男だ。

歳は24

ちなみにリンとジンとユリは17だ。

霧川は……24。

俺とタメだ

今は夜の8時。

もう夏だな、蒸し暑いし、風がヌルイ

で、今俺はいつもの散歩道である、石段200段登った所にある、開けた所にいる。

まあ、神社だ。

古いが独特な雰囲気溢れてて、落ち着く

そんな中…ブン、ザッ…ブン、ザッ…

と心地いい風切り音がこの空間を支配している。

そして何ともこの空間に似つかわしく無い野郎が独り。
竹刀を握り、汗だらけになってやがる。

そうだ、今回の客はコイツだ。

この青草坊主が依頼人だ。

「ハア…ハア…」

夏の体育館、この言葉を聞いて、みんな何を思っただろう？

多分、“蒸し暑い”だろう。

だけど、そこに想像して欲しい。

厚い袴に胴着を着。さらに垂れ、小手、胴、面を装着した、剣道部を。

全員がきつと言うだろ。

マジ臭ッ！っと

そう、その通りだ。

この汗臭さたるは混沌たるものがある。

部室なんて、初めて入った時は息も出来ないくらいだった。

さて、俺は今中学3年生だ。

まあ部活動の節目年…そして、受験戦争だ。

俺も、この夏の大会で引退だ。

延長なんてない。いや、出来ない

この三年間俺は俺なりに頑張ってきたつもりだ。

ま、凡人レベルじゃあ頑張っても、たかが知れてるわけで、昔から

やってきた奴らには敵わない…

つまり負けが見えてるんだ。

しかも俺には、イヤな癖がある…

「円陣」

今日の練習のしめだ。

皆で円を組んで最後に素振る。

よし、今日も頑張れた。

「せいれーっ！」

部長が皆を整列させる。

三年は皆少し緊張気味だ、なぜって？

「よし、これから団体戦のメンバーを発表する。」

そう、今日は男子団体戦メンバー発表日だ。

…俺は“矢村”という単語が読まれる事は無いと分かってる。

だって、俺の名前だもん。

さっきも言ったが俺は俺なりに必死で努力してきた。

けど

「先鋒：室井、次方：藤田、中堅：岡村、副将：田中、大将：三河補欠：並木！以上だ」

な？俺は結局は匹夫な人間で、どんなに努力しても、ダメだった。

「他の男子は個人戦にかけてくれ、すまない、実力は皆同じくらいなんだが」

やめてくれよ！先生！！

そんな嘘つくなよ！！

「お疲れ様ー！」

防具をかたしているところに、岡村が話しかけてきた。

「お！頑張れよ、試合、中堅が要なんだからさ。」

そう大抵はなんでも中堅あたりに一番強い奴を置く事が多い。

大将は部長が断突で多いけどね。

「頑張るに決まってんじゃない。」

岡村は笑顔で返してきてくれた。

俺もそれだけで嬉しくなる。

「ただ、南中と当たったら一発だな、勝てるわけが無い。」

.....南中、この学区域で、最強を冠する学校だ。アイツらはちっちゃい頃からやってて、中学からの俺達ではよほどの才能がないかぎり、勝てる相手じゃない。

ただ、分かってるよ、分かってるけど.....

そんな事言つなよ。

今時間は8時、いつも通りの俺にいつも通りの場所。

ココは俺の練習場だ。

家から近くにあつて、しかも人は滅多に來ない。

…ただ最近、若いお兄さんが煙草を吸いにくるけど、しかもいつも同じ時間に…

何しに來てんだろ？こんな神社に？

散歩かな？

ま、いいや。気付いた時には居なくなつてるし…

俺はいつも通りの練習メニューを終える。

汗だくだくだ…

ふっと…今まで振っていた竹刀を見つめる。

俺…なにやってんだろ？

や、やべー！…また癖が！

抑えろ…俺！

俺は200段の石段を駆け降り、振りきるように家まで帰った。

「オラ！！しっかりやれ！！」

大会が近づくにつれ、練習が厳しさを増す。

ヤバいな…昨日俺寝れなかったんだよな…

さっきも2年が一人倒れたし。

でも、倒れるわけにはいかないな、練習しなくちゃなんない

お前、何頑張ってるの？

あつ本当にヤバイ頭フラフラしてきた、熱いよこの中…

汗がでねえ……

くっ！！！！

黙れ俺！やれる！絶対やれる！！試合があるだろう？それに勝ちた
いだろ！？

今まで散々負けてきて勝てるわけ無いじゃん

…………カテルワケ、ナイ、かな？

バン！！

頭に走る衝撃。

視界が歪む

身体が無くなる感じ

意識が飛ぶ

アレ？

身体が軽い、防具をつけてないのか…

つて、え？

身体を起こす。

「アラ、まだ寝てて、君、熱中症で倒れたの」

アレは保険の先生だ。

ココは……保険室か……

「心配だったのよー、貴方、倒れる時、面を、思いつき貰ったみたいで、頭の方に何かあったらどうしようかと思ってたの……」

そうか、俺倒れたんだ…

ガララッ

ドアが開く音と共に剣道部顧問の先生が入って来た

「ああ、丁度今日が覚めたみたいですよ」

「あ、ありがとうございます。おう、矢村、大丈夫か？」

俺は頷いた

「アレだ、無理するな、最後だと思う気持ちは分かる、けど、そんな無理するな、な？そんなに頑張ってケガしたらつまらないぞ。」

ツマラナイ？

今頑張らないでいつ頑張るの？

最後なんですよ？

先生、俺は戦力外ってことですか？

な？辞めちまえよ、お前は努力したって、人並みなんだよ、限界なんだよ

.....

俺は黙って、目を閉じた。

今は、PM6:30だ、あのあと、俺はまた寝ちゃったみたいで、気付いたら、こんな時間だった。

この時間は夏とはいえ、暗い。その暗さが俺の中にも広がっていった。

いつからだろう、この変な癖ができたのは...

“無意味”

試合結果や試験勉強、それらがどんなに努力しても反映されなかった
それでいつからか、俺は熱くなってやればやるほど、必死になれば
なっただけ。

折れ安くなっちゃったんだ

つまり…最後まで続けられないんだ。

一番肝心な最後まで辿り着け無いんだ。

どうせ、ダメだから、とかそんなんじゃない…途中まで必死に信じ
てやってきたのに、自分自身に限界を言い渡すんだ。

今もう7時だ、今日は練習いいや…

あんな事あったし、今日は休もう…

「切り返し！！始めえ！！！！」

今日も体育館には剣道部の声が響く

けどそこ、俺はいない。

顧問の先生に

「今日は大事をとって休みます。」って伝えたんだ。
ま、当然だよな。

昨日の今日で練習なんかやりたくない

空はまだ明るく太陽はまだ高い

久しぶりだな、この時間……

あーなんかこういうのっていいなー

あんな死にかける事なんで今まで俺やってたんだろ？

馬鹿じゃない？

よし、今日は帰ったら勉強しよ。
そうだよ……勉強しなきゃ。

俺はもう三年生なんだから！

当然、今日も練習しなくていいや。

それより頑張らないといけない事があるんだから！！

意味も無く、走りだし、家に帰った。

机に座って、さあやるぞ！！

..... 10分後、漫画を読んでいる俺がいた。

集中しようとするともるで出来ないんだ。

やっぱり頭打ったのかな？

頭ん中蘇るのは剣道をやっていた時の事だけ。

なんでだ...？無意味じゃん？

個人戦だってどうせ、すぐ負けるし

団体戦だつて、みんな南中には勝てないさ。

ハハ、馬鹿らしい、負けるつて分かつてるのになんで、あんなに必死にやってんだろ？

今は、他にやる事あるだろうが……

俺も馬鹿だつたよな、あんなのやるより勉強やってりゃ良かった。
ふー

溜め息がでるな……

ダンッ！！！！！

思いつきり、机を殴つてた、すんごく、胸が気持ち悪くて、すんごく何かにムカついてる。

俺は次の日学校を休んだ、別に体調はどこも悪くないけど

何故か知らないが、罪悪感に襲われたからだ

頭が痛い、胸が苦しい、なにもかも、見るもの全てムカつく……、

そんな中、

今日一日、家の中のあらゆる物にやつあたった、拳はもう血だらけ……
チクショーなんなんだよ！

ベッドを蹴る

足の小指が変な方に曲がる

「つてえー！ー！！！」

本当に痛い！その辺を転がり回る

ハア…ハア…ハハハ、ハハハ！

何やってんだろ俺…

ふと顔を上げる

竹刀が机の横に立掛けてあった

今まで素振りに使ってたやつだ…試合に使おうと家においておいた
んだけど……

俺は竹刀を握った。

「お前のせいだ……」

そう呟いて窓の外へぶん投げた。

気持ち悪いんだよ！！チクショーーなんなんだよ、ふざけんな！！！！

何回も何回も机を殴った。

痛みなんて、感じ無かった。

「うん？」

道端に竹刀が落ちてる
広い上げて見てみると

「……なんだコレ？」

竹刀の柄の根本辺りは真っ黒だ

これは土なんかじゃなくて…

「血、か…」

はっ、やるじゃねえか、竹刀の柄真っ黒にするほど、血豆だらけになっても、さらに振り続けてたのかよ……

最近、見かけないから心配してたけど

間違いないこれはあの坊主の竹刀だ。

あの神社の匂いが染み付いてる

上を見上げると窓は空いていた、そこから、何回も

「チクショー！」とか何かを叩く音が聞こえる……どうやら、運悪く落下したって訳じゃないみたいだな…

煙草に火を着ける……

「いいねえ…」

俺は雑食のジンや、気まぐれ屋なリンとは違う

ちゃんとやる仕事は選んでる。

つまりおれはこの手の青臭い問題が大好物なわけだ。

「さて、お仕事ができたな……」

煙草を捨てて、ニヤリと笑う、竹刀は預かっておく。

大丈夫だ

テメエの青臭い悩みなんか
ぶち壊してやるからよ。

破る3・後ろ壊

手が痛い、拳を握る事が出来ない…

やっぱり、少し殴りすぎたかな。

痛みで頭が冴えてきた…

なんか、自慰をした後の虚無感みたいなのが込み上げてくる…

なんかもうどうでもいいや…

勉強も剣道もなんかもういいや。

今何時だろ？

外から学校帰りの小学生の声が聞こえてくる。

今日も終りだなー

外…あつ、竹刀どうしよう？

捨てたはいいけど、イタズラされて誰かにケガさせたら嫌だしな…

じーと天井を見ながら考えてみる。

途中から天井の染みに意識が行った

ハ…、取りに行く、か…

「ただいま…」

一階から声がした。

どうやら、母さんのお帰りみたいだ

ならいつか、どうせ母さんが拾っただろうし、持って来てくれるさ。

トン、トン、トン…

ほらね、母さんが階段を上がって来た。
きつと右手にでも竹刀を持ってるさ。

「^{はじめ}朔えー？」

俺の事呼んでるし、間違いないだろ。

「何ー？」

フスマを開けて母さんが入ってくる。

竹刀は…持って無い？

「これ…ポストに入ってたんだけど？友達？」

代わりに持って来たのは、メモ用紙？裏は何かの広告だ、即席で作ったんだな、コレ…

いつもの場所で待ってる

「いつもの場所って？」

「分かんない…他に何か無かった？」

「他？うーん、あったけどゴミよ？」

「ゴミ？」

「うん、煙草の箱、本当に頭くるわよね、人のポスト何だと思ってるのよね！」

煙草？いつもの場所？

母さんは文句を言いながら、部屋を出ようとする。

「あつ！ねえ、外に竹刀落ちてなかった？」

「竹刀？落ちてなかったわよ？」

間違いない、よな？

煙草、いつもの場所、消えた竹刀

思い当たるのは一つだけ…

「うん、分かった。ありがとう」

pm8:00

いつもの時間、いつもの場所、いつもじゃない俺

石段200段を登り境内に、
いた。

煙草の火が見える
脇には竹刀がある

………なんであの人が？

「あの、貴方ですよ？ポストにメモ入れたのって？」

「…ああ、そうだよ。」

ブワッと白煙が出てくる。
臭い…

「その竹刀、俺のなんですけど」

「ああ、コレ？コレは拾ったんだよ、今日、道端に落ちてて。」

「あの…返して下さい…」

「ハハハ、ソレは無理」

え？

「え？、いやソレは俺の……」

「捨てたんだろ？」

「……………」

黙るしか無い

「今日、悪いがコレ拾った時間こえたんだフザケンナ、チクショー
つてな。」

確かに叫んだ。

「だから、コレは俺が貰う。」

自然と拳を握る。

……でも、いいんじゃないか？別に、もう辞めたんだし。
返って好都合じゃん、捨てる手間が省けて……

「……………いいですよ、あげます。……一つだけ聞いていいですか？」

「何？」

「なんで俺をココに呼んだんですか？」

ニヤつと笑う男

「コレを見せたかったんだ。」

手に竹刀を握り、振りかぶる

「え？」

狙うは鉄塔

「まさか……」

踏み込み、振りきる。

「やアめろおー！ー！！！」

ガンツ！パキヤツ！！

鈍い音、折れた音。

笑う男

何もかもがム力ついた。

何もかもが気に喰わなかった。

ハッキリとはしないけど、そう感じた。

ハッキリとしてる事は、目の前が濡れて何も見えないこと

男に向かって殴りかかろうとしていること

それはム力ついてるとかそんなじゃなくて、悲しかったからって事

「お前、本当に中途半端……」

男は俺の拳を受け流して、そのまま右手を掴んで男の右手を添えた
……って、え？

身体が浮く、男がしゃがむ……

目を眺める、いや投げられたのか？

蒸し暑い中、虫が鳴く

「ゲホツ！！ハア、ハア……ゴホツ！」

息が詰まった

「しかも、弱ッ！」

うるせえ！俺は剣道しかやってないんだ！

「何がいらないだよ、めちやくちや怒ってんじゃん？しかも何、泣いてんの？男のくせに？」

男が倒れた俺を見下て続ける

「用はお前、中途半端なんだよ。自分でふっきったつもりですか？」

中途半端……………確かに

「お前本当に馬鹿だよ、アレだけ毎晩毎晩ココに来てやってたのに、急に飽きたとか言って辞められると思ってんの？」

「……………」

「ま、辞められないから、『やアめろおー！』なんだろうがな。」

「……………うるせえよ！あんたなんか何が分かるんだよ！！さも知ってますみたいな事言いやがって、フザケンナよ！！」

殴りたいけど…届かない。クソッ！体がびびってる、コエーよ

「……………確かに、俺はお前の事は何も分からない、お前の事はお前が一番分かるだろうな。じゃあ、なんで俺に殴り掛かった？なんで涙を流した？なぜ止めた？一度は了承したくせになんでだ？」
「……………分かんねえよ！そんなの…ただ何かムカついて気に入らなくて……………」

気に食わなくて、いらついて…自分を見捨てたみたいで。

「……悲しかったから？」

「……え……？」

「ずっとアノ竹刀でやってたんだろ？素振り？」

何が言いたいのか分からない、俺は黙ってるしか選択は無いみたいだ

「用は、アレはお前の剣道が具現化したもんだと考えてもいいわけだ。それが目の前で壊された…。それがクダナイ道なら笑って済むだろうな、だけど、自分なりに必死こいて築き上げてきたもんなら悲しいだろうし悔しいだろうな」

「悔しい…？」

「自分が築き上げてきたもんを俺なんかにつぶ壊されたんだから。」

「……………」

熱く湿っぽい風が吹く

今日は夏なんだと、肌で感じた

「…それでもって、それを守れなかった自分自身が」

煙草の煙が流れてく

…この人の言ってる意味は何となくは分かる……それにコレって…
「なんで、お前が竹刀を捨てたかなんて知らない、お前の事は何一

つとして知らないから、でもお前がとつた行動の結末は分かる。
…今見たから、な。」

「……」

「お前は…2回、竹刀を捨てたわけだ、窓からと、俺に、そのどちらも無理矢理諦めようとした産物って感じで、そして俺に捨てた結果…今泣いてるお前がいる……」

なら、窓から捨てた結果はどうなる？
変わると思つか？」

そんなの聞かれ無くても分かってる。

「しかもだ、窓から捨てたのは竹刀だけじゃないだろ？竹刀と一緒に何を捨てた？」

ナニヲステタ？

カミ？

ティッシュ？

ゴミ？

違う

捨てたのは

俺の本当の気持ちだ

「竹刀だけでこんなに悔しくて泣いてるのに、それ以上のものと一緒に捨てたとくれば……まあどうなるかわかるよな？しかも、今度は壊すのは俺でもなければ誰でもねえ、お前自身なんだよ」

竹刀だけでも、今俺の中に穴が空いた、なら俺の本心を捨てたなら？しかもそれを壊すのが俺自身なら？
多分……いや確実に

一生の“悔”になる

俺の中に、今まで偽って、逃げて、隠そうとしてた事実があった

俺はソレを誰よりも、知ってた、だから隠そうと押し込んだた

でも今、晒け出された事実がここにいる

そして、一緒に引っ張り出された、押し込んだ感情もまた、ここにある

「な、ら……お、れ……どうし、たら？」

涙が止まらない、声が出ない、何かを吐き出そうとしてるみたいに喉が動く

男は月を仰いで

煙は登る

「自分の本当の気持ちも大切な物も、捨てなきゃいい。」

自分の大切な物？本当の気持ち？何を軽々と言ってくれやがるんだ

「……………ソレだけを守り通したとしても、結果が、結果がダメなら！？」

男の無責任な言葉に噛みつかずにはいらなかった

俺は今まで俺なりに努力してきた、だけど結果にはならなかった。

試合では負けて

テストでは間違えて

メンバーには入れなくて

何したって結局は結果がダメなら、ムカつくし、やりたくなんかない。

「結果なんて、後から出来る物であって、守れるもんじゃない。」
何が言いたいんだろっ、コイツは、いきなり人の前に現れて、投げ飛ばして

「結果云々の前にお前は何を積み上げてきた？それこそ守るものだろ？」

色々と考えが回る。

俺は何を考えてやって来たんだ？

勝ちたいから？結果をだしたいから？

確かにそれもある。

あつたけど

それ以上に

“諦めたくなかった”

だから、やってきたんじゃないのか？

“努力”

こんなにもありふれてこんなにも難しい言葉は、きっと他にはないだろう

「結果がダメでもその“守り抜いた事”に胸を張って堂々としてりやいい。」

とんでもない言葉を煙りと一緒に吐き出す
本当になんなんだ、この男は

「…俺、諦めたくなかったんです…」
ずいぶんと落ち着いてきてたのに

また喉から何か出そうになる

それを堪えたら代わりにまた目から漏れてきた

「諦めたくないから、馬鹿みたいに、やってきた、だけど胸なんか張れない！」

結果は着いてくるものだ…って昔、先生に言われた事があった。努力し、継続してようやく結果が出てくる…っと、だけどソレって結局、結果が出なければ、努力も継続も無意味って事だろ？

なのにこの人は結果何ていらない、何て言ってくれる

「結果がでなけりや努力も継続もいみなんかねえんだよ！」

フザケンナ…今日何回言った言葉だろうか？

どんなに“諦めたくない”なんて思っても、俺は凡人『頑張ったで賞』なんてもらえる結果は出せない

つまり、やる意味なんて無いんだ、自分に合った器で我慢するしかないんだ

コレは誰へでも無く、今までの自分に言おう。

「フザケンナよ…」

「……………」

何だまだ何か言う気がよ、これ以上もう聞く必要なんて無いじゃん拳から血が溢れたす、さっき付けたキズテープは、もう真っ赤で粘

着力も無かった。

「……言いたい事は理解出来る。」

何だ、分かってるんじゃない、…そう思ったら不思議と凄い怒りが沸いてきた

「でも、お前の考え方じゃあ何も出来ない、何も始めず、やる前から負けた気になって臆病になってるのと同じだ」

何も言えない俺の代わりに、鈴虫が返事を返す

ああ、その通りだ。っと、涼しげに返事を返す

「さっきも言ったが、自分の胸を張れ、他のを張らしてやる必要なんてない。自分自身を認めてやれ。」

本当になんなんだこの男は

とんでもない言葉を

とんでもない真顔で

とんでもなく真っ直ぐに投げってくる。

「“諦めたくない” 凄く大変な物をお前は胸に抱いてた。結果がどんなに出せなくても、必死にその気持ちを守り抜いてた。」

今は違う、俺は無意識にそう呟いた。

「そうだな、今は違う、だけどこの今が最後のチャンスだ。」

「え？」

「諦めたくない」こんなデカイもん抱えてアレもコレも落とせず
にいられるほど、器用には見えない。きつとお前、今までいろんな
もの諦めただろ？」

凶星だった。

最後の最後つて所で諦めつてた姿がよぎる

「今諦めようとしてる物は、その中で必死にお前が守り抜いてきた
物だ。つまりこれだけは落としたいくないって思ってたもんつてわけ
だ。」

最後、そうか、これ捨てたらもう諦めるものなんてなにも無い。

「だから、最後の今だ。今まで諦めずにいたお前。だけでもしコレ
を捨てたなら、コレからは臆病風に流されてくお前になる。」

……………確かに、俺は器用な性格じゃない、家でも料理やりながら
掃除とかすると、料理がコゲてたりする。
何か考え出すともう周りは見えなくなる
だから、授業の時の回答率は30パーセントも無いだろう

つまり俺は凄い不器用なんだな。

だけど一つの事だけなら、やり抜ける自信ならある

「お前は結果を求めてたな、…気付いていないかもしれないけど、

“諦めたくない”って気持ちでずーとやり続ける事ができたお前のその道は十分な結果だ、それは胸を張っていいもんだ、認めてやっていいもんだ。”

あつ、と声が漏れる

確かにソレはソレで結果には違いない。

そうか、分かったよ先生。努力も継続もやり抜いてそこで、そのやりぬいた事実が初めて結果と言える物になるって意味だったんだ

「だから、この結果をやりぬけ、まだ終わっちゃいない。」

二人の男はニヤッと笑った

真っ赤に染まったキズテープは粘着力は無かった、だけど、それでもまだ、拳にくっついてた、シッコイ奴だと思った。
でも、俺も同じだと思った。

「…まだ諦めるわけにはいかない、って訳だ。」
ようやく鈴虫に代わって返事が出来た。

「おう、その通り。ま、一つぐらいなら、どんなに不器用な奴でも諦めなきゃやり抜けるだろ」

男の言い方は少しムカついたが、まあここは押さえよう。

「ああ、それと…」

男はベンチの裏の茂みに手を突っ込む

「ほら、まだ必要だろ？やり抜くんだったら」

右手には竹刀が握られていた。

「……………え？」

じゃあさつき折られたのって、折れてる竹刀の柄の部分は真っ白だ……まるで新品みたいに。

「まあ、嘘も方便とはよく言った物だな。」

乾いた笑い声が余計にムカついた。

「…アンタ、一体なんなんだよ！！」

「俺か？俺は破壊屋だ。」

「は？破壊？……なんにも壊してないじゃん」

事実なにも壊れてない、俺は諦め無かつたし、竹刀もある。

「お前のコレからを壊して、今までにしただろ？つまり、変化をぶち壊してやった訳。」

「……………」

黙る事で相づちを返す

「まあ、変わらん事の方が良いものってのが世の中にはあるって事だよ、ああ今回は料金とかはいいや、雀の涙も命取りの学生だろうし、タカが知れてるし。ぶっちゃけ今回竹刀はお前の学校から頂戴したし」

「……………」

「ま、そんな喜ぶなって、今回だけだからな」

怒りって黙ってるだけでも伝わらないんだな

「……………ま、うまくやれよ、最後の最後になるなよ?」

「分かってるって」

コレからも諦めるにでられるような、継続点にしてやる

「……そうか、じゃあお別れだ。」

「……そうなのか?」

「ああ、そういう決まりだ。」

「…………じゃあな、青年。武運を祈る。」

男は階段へと消えた。

「……ありがとう。」絶対に聞かれない言葉を、絶対に言いたくない奴に向かって呟いた。

ま、聞こえる訳も無いし、いいか。

リー、リー、と鈴虫が鳴くように。

俺は竹刀を振ろう。

コレしか俺には出来ないから。

コレしか俺は守れ抜けないから。

そしてコレが俺だから。

鈴虫が鳴く、そんな中笑う男が一人階段にいるのには俺は気付かなかった。

〈後日談〉

その後、青年とは会ってない。まあ、大丈夫だろう。

そうそう、風の噂で聞いたんだが、この前の剣道の大会で、強校のレギュラー相手に延長3回まで戦い抜いて敗けた奴がいたらしい。最後には体力もつきて何回も転んで、立ってるのがやっとだったらしく、終わったらぶっ倒れたって言うんで、今じゃあ有名だ、ソイツ不思議な事にぶっ倒れてる時の顔は笑ってたらしい

そして、竹刀の柄は真っ黒で、しかも、もうほとんどはげてたんだとき。

ハハハ、やっぱりアイツの竹刀、学校から盗んだのは失敗だったかな？

破 4・前 壊（前書き）

前回はとても考えて書きました。よって最期はもう勢いです、それを今回は反省し、何も考えずに突っ走りました。もう、なんでもありです。

破く4・前く壊

ハイ、みなさん。

こんにちは、靱です。今、俺スツゴク怒ってます。
もうアレです、この世の全てにです。

今なら捨てられてる仔猫も見捨てられます。

……多分……。

無理かな？ いや……無理、ツスカね？

まあいいや、理由をお話ししますね。
じゃないと話が進みませんからね。

まず事の始まりはある依頼からだっ たんです。

「あゝ……私はコノ仕事無理だ……何かブラックそうー」と霧川さん。
何やらパソコン画面を見て嘆いてる。

こついう時は絶対に、そう絶対に霧川さんと目を合わしちゃいけない。
い。

合わせたら最後、昨日なんか、塩酸を買って来い。とか、サスペン
スが飛び付きそうな物を要求してきて、結局近くの中学に忍び込ん
だ俺がいたわけで……だって普通買えないよ！？塩酸って！

だから絶対に合わしちゃいけない、例え今お茶を飲んでいたとして
も、めちゃくちゃ忙しい振りをするんだ俺！！
頑張れ、忙しい振りしてお茶を飲め！

「何してんの？バカ犬。」

やってきました、俺の天敵にして、見た目子悪魔（中身はサタン）自称、破壊屋のマイナスイオン事リンさんが……っか………バカまでは許してやるが犬は無いんじゃない？

「…お茶を飲んでるんだが、何か？」

いや、俺ここは自然に振る舞うんだ

怒りは、我が身に刻め

「いや、何か必死な目してお茶見てるから、遂に猫舌克服にチャレンジか？と思つて。」そうか、じゃあ暖かく見守っていてくれ。「いやー残念、そうだった決意を揺るがしてやるうと思つたのに。」

コイツカワイイ顔してなきやためらわず殴ってやるのにな……死んで男に転換してこねえかなー

「ねえ！！！」

ビクン！！！！！！霧川さんがこっちを見てる。

「ハイ？」

ナイスだリン！！

お前はやっぱり女の子でいいぞー！

「ちよつとコレ見てー」

霧川さんがリンに紙を渡す、さっきの奴コピーしたのか……

「ああ、仕事ですか」リンが紙を貰ってソレを、自然に…本当に反応を楽しむとかそんなイタズラ心も無しに、本当に自然に俺の前に出す。

「待て。」

待て待て待て、どういう流れでこうなるんだ？

「いや、仕事だよ？なに言ってるの？ジン？」

ああ、無邪気ほど邪悪な物って無いんだな…

「いや、コレお前にとって霧川さんが…」

「何言ってるの？私はやるなんて言ってる無いじゃん、見てといわれたから、見た。そして仕事だから、お前に渡した。」

何、そのめちゃくちな中間管理職、会社なんて一日で潰せるんじゃないか？

「…俺だってやるとは言ってる無いじゃん」

ココは噛みつかないと、イエスマンにはなりたくない…

「いや、お前に拒否権無いよ」

「えー？！お前理不尽にも程があん……」

「昨日アンタ夜遅くまでなにやってたの？」

「……………え」

ま、まさか…バレてた？

「いやーまさかアンタが、あんな事するとは、犬から、サルに昇格かぁー？」

昨日、夜、思い当たる事は一つだけ…

いや、言い訳するわけじゃないけど、俺今十代です
十代の男って言ったらもう、アレッスよね？狼に憑かれてるが如く
じゃないですか？

多分十代の男は食欲より性欲の方が勝ってるかと思うんですよ

ソレに家って男2の女3じゃないですか、いやまあ…色々あってこ
う不揃いなんですけど

しかも皆、美人ときたら男の俺としたらもう、危ないわけで、何す
るか分からない訳ですよ。

でも…それは法に触れる訳でなおかつ、きっと俺は法外な手段で葬
られるだろうし、行動なんて出来ないわけです。

そしたら自然やる事なんて分かるでしょう？多分これ以上言ったら
なんか引つかかりそうな気がするんで自主規制をかけますが…

つまりは昨日の夜、俺は一人でヤツたんです。

絶対にバレるはず無いのに、何で？

「もう、やるしか無いよね、ジン君？」

「くっ……」

一時の過ちがこんな結果になるなんて……

「何？イヤなの？仕方ないなーそんなアナタにはケンケンをあげよう！」

「は？ケンケン？」

「そっ、犬の権利と書いて犬権。」

「ちなみに…内容は？」

「主人に忠実に従う。」

「是非ともやらせて頂きます。」

泣いてなんかいないぞ、お茶が熱かったただけだ！！

「なに哭いてんの？」

「哭いてねえ！！字がちげえんだよ！字が！」

「あら、そんな怒鳴っていいと思ってるの？……ユリちゃーん！昨日ジンがねいふうー！」

リンの口を思いっきり手でふさいでやった、じゃないと、俺に明日は無い。まあ……霧川さんのせいで女性は怖くてあまり触れないんだけど、もう、関係ない。俺の明日には変えられない

「お願いだから、言わないで、本当にお願ひします」

プライドも何もかもかなぐり捨てて謝る俺……涙が止まりません

「何？昨日ユリちゃんを想像で美味しく頂いちゃった事を言わなきゃいいの？」

わざわざ説明ありがとう。

「……………ん？ジン後でちょっと来い。ちょっと賤がなってなかったかな？」

霧川さん、賤と称して俺のファーストキス奪っという何言ってるんですか？

しかも、あの時俺の鼻つまんで、無理矢理、吸わせたでしょ？

もう、恥ずかしくて、2日は熱出した俺がいたわけですが……

まあいい。

とりあえずこの場から離れないときっと色々と危ない。

そして今日は黒岩さんと一緒に避難しよう。

あの人も霧川さんにとっては賤の対象らしいから、協力してくれるはずだ…

「じゃあ仕事に行つて来ます！」

行つてらっしゃいと、執行猶予が許された、破壊屋から飛び出す俺、シャバの空気ってこんなにも新鮮だったっけ？

…よし、本気でやろう。今回はいつにも増して本気でやろう。

そう誓い、依頼人の住所へ向かう。

今日は晴れてて、雲一つ無い

爽やかな風が吹き、行き交う人みんな、幸せそうに見える

さて、今回の仕事内容は……と

……参ったね。一瞬にして世界が変わった気がした。

〔破壊対象…私〕

コイツは本気でヤバいな…

行き交う人みんなニヤけてるように見えた。
空気が重くなった気がした

「へー、ジンがねー、ま、そういう年頃かな？」

霧川さん、ユリちゃん、リンこと私は、破壊屋一階のちゃぶ台を囲み、ティータイムを楽しんでいる。

「いやいや、年頃つてかもう、野生化したんじゃないんですかね？」
うん、絶対にそうだ。そして奴を保健所に引き渡し、ユリちゃんを
守ろう。

「……で、ユリはどう思ってるんだ？ジンの事？」

うつわースッゲー霧川さんニヤけてる、あれは聞かなくとも分かつ
てるけど、言わせたいんだな……

「い、いや、わ私はその、勅君の事は……」

まだ今日一回も馬鹿犬と顔合わせて無いユリちゃん……そうだよなー、
私知ってるって事はユリちゃんも知ってるよね。

なぜって？私がジンのこの秘密を知った理由は……ユリちゃんがジンの
の部屋に仕掛けた盗聴機だ

その電波を受信できる奴をユリちゃんから偶然借りて、ソレを返さ
ずに持っているんです。

おかげでこんなに甘い密が吸えてます

つまりはユリちゃんも知ってる訳。

しかもあの馬鹿犬、まさか盗聴されてるなんて知らないから、果て
る時に、ユリちゃんの名前を言ったから、さあ大変。

ユリちゃん護衛兵の私にとって今ジンはただの敵に成り下がったわ
けだ。

「ユリちゃんジンのどこがいいんだ？アイツ女性恐怖症だし。」
アンタが言いますか、霧川さん。

「いや、ジン君の事好きって、いうか…た少し気になるな…って思ってる」

それで盗聴か、ユリちゃん、本当にピユアだね！

「じゃあ好きでは無いんだ？」

うん？霧川さん何考えてんだろ…凄くにやけてる…「え？いや、好きとかはまだな気がします。」

ユリちゃん、そんなに自分の感情コントロール出来るのかい？無理だよ、コントロールするのは、だって

「じゃあ今日、私がジンをペロつと食べるけど問題ないね？」

ここは破壊屋、魔女が住む店なんだから。

「え！？い…や、それは」

ユリちゃんってはつきりとヤダって言えない子なんだよなー、ま、そこもカワイイ所なんだけど

「うーん？何か問題でも？大丈夫、ファーストキスも奪ってるし」
もう何がどう繋がって大丈夫なのか全然分からない。

「でも、霧川さんには黒岩さんがいるじゃないですか？」

えー！？ソコそう繋がってたのー！！？

「いやいやいや、アイツからは全て奪った、もう奪う物は無いよ」
いッや、霧川さん！何気なくサラッと言ったのけてくれましたが、ソレ爆弾発言ですよ！！

「で、でも黒岩さん、きつと霧川の事好きですよ？」

えッコレッて…まさかまさかの形勢逆転か！？

「いや、それは知ってる。」
アツサリ認めてしまいました

「それに私もアイツの事好きだし」な、ななななななな……
なんだってええエエエ!!!

衝撃告白うー!!!?

「え?き、霧川さん、黒岩さんの事好きだったんですか?」

ダメだ同様しすぎて声が震えてる…

「いーや」

霧川さんが笑って目を瞑り紅茶を覗く

「え?違うんですか?」

もうユリちゃん興味津々だ。さっきからずっと紅茶を持った姿勢で固まっている

「好きだった、じゃなくて、今も好きだよ。」

グツは!!!大人の女ってスゲーー

ユリちゃん顔が真っ赤だぞ

「ねーなんでユリちゃんは黒岩と私の事知ってたの?」
あつ、そういえば…何でだ?

「あ、あの、それは…見ちゃったんです。その霧川さんと黒岩さんがキ、キスするのを…」

なるほど、それでか…

「ああ、それでか……………じゃあ話し戻そうか？ユリちゃん、私、ジン食べていい？」

きーりかーわさーん！…！！？！

「え？？……………だから黒岩さんは？？」

「うっん、私が黒岩を好きだろうと、ジンを食べるのには関係無いわ。」

いや普通関係してきますよ？そこら辺は…

「今聞きたいのはユリちゃん、アナタの気持ちよ、イヤなのか？それとも良いのか？アナタはどっちを望むの？」

「わ、私は……………」

霧川さん……………頑張れユリちゃん！！

「い、イヤです。イヤなんです！！」

「それが聞きたかったの、……………ジンに伝えなきゃね、躰は延期だつて。」

ゴーン、ゴーン

時計が4時を知らせる、かれこれ一時間も話していたようだ…

ユリちゃん、泣きそうになってる。

霧川さんもよくやるよなー

“拒否、否定が出来ない”これはすんごく大変な事だと思う、ようは自分の意思を持ってないのと同じだから……
ユリちゃんがココに来た時はしゃべる事が出来なかったと聞いている。

まだちっちゃい時に親を亡くしたらしく、親戚の家をタライまわしにされたらしい、それで、きつと自分の意思を無くしたんだ。
あつたらきつと邪魔になつたんだろう。

そしていつか頷く事だけしか必要にならなくなった……

………それを変えたのが、あの馬鹿犬だった、どう変えたかは知らないが、変えたんだ。

そこはまあ誉めてやるべき所かな？

そして今、霧川さんもユリちゃんを変えようとしている。

なんとも釈然としないが、あの馬鹿犬を餌にして。

まったくあの馬鹿犬……仕方がない犬権に、一日一回の拒否権を加えてやるか……

それにしても、まさか霧川さんと黒岩さんがねー

あれ？黒岩さん…

「そういえば昨日黒岩さん見てないんですけど？何処が行ったんですかー？」そう、昨日から全然姿を見てない。

「あー、何か仕事やってるらしいわよ？また金にならない奴、アイツ性格が良すぎるからさ、商売は出来ないんだよねー」

そう言つて霧川さんはスッゴク楽しそうに台所へ食器を片付けに行つた。

なんなんだよ、チクショーここは乙女ばっかか！？

破 4・前 壊（後書き）

さて、今回書いてみてヤバいですね、全然テンポが揃わない感じになりました、やっぱり考えてやろうと思いました。

破 4・中 壊（前書き）

はい、今回は若干同情の念が沸くできとなっております

破く4・中く壊

さつきリンからメールで今日帰ってきてても大丈夫だよーと書いてあった。嬉しい事この上ないが、今俺はそれどころじゃない

目の前には依頼人の松田 まつた 那美

がいる、性別は女性、年齢は24

身長は168cmぐらいかな？

そして何より…体重が95kgもあるのが最大の特徴にして、今回の依頼だ。

ハー「破壊対象…私」に二重線を引き“脂肪”と書き足す。まったく、すんげーここに来るまで焦ったんだからな！！

ヤバイ、自殺志願だったらどうしようとか色々と考えちゃったじゃないッスか

「それじゃあアナタが望む破壊対象は…えっと、あの、脂肪ですか？」

ムシャムシャ

「ええ、そうよ。痩せたくても痩せられなくて……」

ムシャムシャ

そういいながらさつきからリンゴを食べている、かれこれこれです切れ目だ。

「何かその食欲に心覚えは？」

ゴクッ、ゴクッ…

「ふー心覚えね…ストレスかしら…学校の方で私先生やってるんだけど…ほら学校ってストレス溜まるのよ！ソレが原因だと思うわ…」

そうかストレスか……味覚の方も来てるな…リンゴとコーヒー牛乳は合わないだろ？

「……あの、確認しますが、痩せたい…ですよね？」

ここは重要だ、本人にどのくらいの気があるかでやり方が変わってくる。

ガブツムシヤムシヤ、ゴクツゴクツ

「もちろんよ！！」

色んな意味でいい度胸してやがる。

「んじゃあ、契約書のほう書いて下さい。」

「はい」

依頼人が契約書を書いている間、グルッと部屋を見してみる。

ココは都内のアパートで、7階だ、間取りは部屋が2つ、あとキッチンとトイレそしてシャワールームがある。

で今キッチンのテーブルに座っているわけだが、やたらと目立つのはゴミの量だ部屋のアチコちにゴミ袋が置いてある…なるほど、ほとんど食事はインスタントだ、あとは、お菓子の袋が主体だ

………頼む、キッチンの水回りぐらい片付けてくれよ…

あれ、何週間溜め込んだの？

ん？

ゴミ袋に……写真…？大量の写真が切り裂かれて、捨ててある。

なんだろう？

「ハイ、書けたわよ。」

依頼人が契約書を書いてくれた。

「さて、と。」

どうしよう…今回はハッピーエンドもバッドエンドもないし。
破壊するものが具体的過ぎて、ぶっちゃけ……つまらない。

まあ、でも、それが仕事だしな、うん今回は真剣に行くって決めたし……よし。

「ストレスからその食欲が来ているなら、どんなに、痩せようとして、運動しても無駄でしょう、仮にそれで痩せても、根本的な解決をしていないので、また繰り返し暴食を起こすと思うんですよ。」

「ええ、きつと、そうなるでしょうね、……私かれこれ3回はダイエットしてますし。」

「ああ、じゃあ、やっぱり繰り返しで？」

「いや、途中で止めちゃうんですよ、コレが！、きつと続けられればいけると思うんです！」

笑顔で、「破壊対象：脂肪」

に二重線を引き、“肥大化した度胸”と書き殴る。

「……そうですか、やっぱりそれは、根本的な問題を解決した方が

「楽そうですね。」

「ええ！お願いしますー！！」

よし、いい返事だ。

ただ、その右手に持った、ポテチを置けー！！

.....

「あのー」

「はい？どうかしました？あつ！流しはずいぶん掃除してなくて……ごめんなさい、汚くて……」

「い、いえ、大丈夫、大丈夫なんですけど……すみません、掃除していいですか？」

……さつきから臭さくて集中出来ない……

俺、鼻がよく効くからなー……

だから、出来立てのコンクリートの匂いとかで、吐きそうになるし、強い香水とかしてる人は避けるし。

……まあいいや。

とにかく、片したい。この部屋をー！！

「え？いや、そんな大丈夫ですよ！」
笑顔で返す那美さん

「いや、俺がダメなんです。」

そついい有無を言わせず片付け初める。
まずは…流しだな。

今、夜の8時だ

ジンはまだ帰って来てない、ま、良いけどね黒岩さんもなんか霧川さんと一緒に買い物行つて帰って来ないし…ユリちゃんは部屋にいるけど、…多分寝てるな…

さて、リン事私は何をしているかというと、暇なんで、ジンが担当してる人の情報を集めてます。

なにぶん、今回はヤバそうだし、バックアップしないとさすがに可哀想だわ…

と、言うことで今調べてるんだけど、へーずいぶんと美人じゃん、一年前の写真だけど、まあそんな変わらないだろ……

今は、学校の先生やってんだー。
なんだろう、なにがあったのかな？
まさか、生徒と出来たとかそういう色恋沙汰かな？
これだけ美人ならみんなほっとかないだろうし…

ブーブーブー

携帯が震える、ディスプレイには……馬鹿犬とかいてある。

「もしもーし？首尾はどう？」

「…ああ、最悪…今、片付けてる所

あつ、ちよつ触らないで！！

いや、大丈夫ですって俺も男ですし。」

「なッ！？何やってんの！！？」

「いや、片付けてんの…ほら、綺麗だとやりやすいじゃん？」

「や、やりやすい！？」

待て待て待て、一体何ヤツてんだ？あの馬鹿犬！

「あつ…俺今日帰れないから、晩飯の俺のオカズ適当にリンがしまつておいて。」

……早く来てー！

悪い、切るねー！」

「ちよっ!!」

切れた…待て待て待て、待って!!

いくらジンが最近サルになりぎみだからってそれは無いでしょ？

………だってアイツ、女性恐怖症だし……

ふっとパソコンの画面の笑顔の美人教師に目が行く。

そういえば、彼女の自己紹介文で………《生徒の悩みに正面からぶつかって行きたい》って………

まさか………

『ジン君…私ダメな先生なの、生徒一人救えなかった…』

『いや…那美さんは立派ですよ、立ち向かった、それだけで充分、生徒にとって救いになったと思います。』

『………ありがとう、ジン君………』

『いえ、これが仕事ですから…』

『………そう、なら、アナタの悩みは何？』

『え？』

『私にも仕事をやらせて欲しいの、ねえ？ジンは何か悩んでる事あ

るの?』

『……………俺、実は女性が恐いんです、昔ある女性にイタズラされて、それ以来恐くなって…』

『大丈夫、おいで…恐くなら…』

『那美さん…』

『うつん…今は、先生って呼んで…』

ガバツ!!

18禁

「うぎゃああ!!!!」

自分で考えておいてなんだが…凄まじい鳥肌が…………

「待つてよ、でも実際有り得ない話しではないのよね…………」

ヤバいな、うん、ヤバいぞー

「何がヤバいんだ?」

ビクン!!……………!!

「おっ!良い反応だな!」

無精髭に優顔…………

「…ッ黒岩さん!!」

「ただいま、どうした？そんな真つ青な顔して？」

ジンが今、大人の階段転がり落ちてサルになりました、伝えられるわけがない。

いや、待てよ？

………黒岩さんなら、相談してみても平気なんじゃないかな？
男の事はやっぱり男に任せないと……

「あの、実は……」

「なんだ？相談か？良いのか俺なんか相談して？」

うーん、私も悩む所なんだけど……

「………ここは、男である黒岩さんの方が良いかと……」

「……なるほど、まあ聞くだけ聞こうか……」

黒岩さんって真剣な顔すると、なんだか眠そうな顔に見えるのよね

………まあ、慣れたけど。

「実はジンが今……」

「あー何か、霧川が言ってたな……まあ、男なんてそんなもんだよ。」

「………いや、それが、今、ジンひよっとしたら、大人の階段転がり落ちて発情犬になったかもしれないんですけど………？」

「いや、男なんてそんなも……」

黒岩さんは欠伸一つ、つこうとして口を開けたまま止まっている……

ああ……やっぱり、アンタは眠かったんだね
「リン……!!」

うっわー、超真顔!!!!!!

何?!マジで恐いんだけど!!?

タカみたいな目になってやがる。

と、とら……殺られる!!

「いいか、リン!絶対この事は他言無用だ、いいな!!これには人命が掛ってる、マジな話してバレたらアイツが危ない!!」

イッターい!!

ガシッと黒岩さんが私の肩を鷲掴みして、離さない。

「い、言わないですよ!それに私の勘違いかもしれないし……」

「ふー……なんだ、びつくりさせるなよ……」

フーやっとな肩から手が離れる。

痛かったー

「……ただ、今日ジンが依頼人の美人先生の所に泊まるって電話があつて……」

ガッシイイ!!!!!!

うっぎゃあああああ!!!!!!

「リン!!!!!!マジなのか!?ソレは事実なのか!?!」

千切れるうう!

黒岩さん！！肩肩あ！

それに顔近えし、押し倒されそうだし、はた目からみたら、マズイ絵柄だな、コレ

「ちよっ！止めて下さい黒岩さん！！落ち着いて！！」

「……あ、ああ、悪い……ちよっとな気が動転してた。」

そう、はた目から見ればマズイだろうな。

「……………」

この時、私は初めて見たんだ。

「へー気が動的して、リンを襲ったのか？アキラ？」
マジ切れしてる、霧川さんを……

「……い、い、いや、アケミ、落ち着け……違う、うんだ」

黒岩さん、今日は表情豊かだね。

「アキラ……先に私の部屋行ってる、何も言わず、ただ従う犬の如く……行け。」

マジこっえええ！！

黒岩さんは黙って椅子から立ち上がって奥に歩いてく……、アレ？なんか黒岩さんジンと被って見える？

「逃げたら、お前の狼権は剥奪するからな！」

あつ……やっぱし？

黒岩さん、ビクツってなって振り向かず歩いてく……ああ、ありや
哭いてんな……

「……リン、大丈夫か？」

霧川さん、まだちょっと顔悪いよ……

「え、えつと大丈夫です、あ、あああの、」

「大丈夫、お前は悪くない、悪いのは男だ、な？」

「……………」

ごめんなさい黒岩さん、私もう恐くて泣きそうなの。
だから弁解してあげられないわ……

「大丈夫、私があんとかするから……ただ、今日は絶対私の部屋覗
くな？ユリにも伝えとけ、いいね、絶対覗くなよ？」

大丈夫、例え霧川さんの正体が恩返しに来た鶴だとしても
私達はまだ若い、こんな所で死にたくないかない。

霧川さんは拷問部屋もとい自室に歩いてく……

……サーテ、今日ノバンメシナニシヨウカナ？

よし、ある程度片付け終わったな…

イヤー初めてみたよ…ゴキブリが飛ぶ所…まだ、何かが洋服の下でうずいてる気がする…

「さて…、那美さん。」

「はい？イヤーずいぶん綺麗になったわねー、4時間もかかったけど…」

今、深夜2時だ。

「貴方のプランが決まりました。」

「あら？どんなのになるの？」

那美さんはもう眠いのか、ただ言葉を繋げてるだけだ…

「カウンセリングをやります。」

ハハハ、もちろん免許なんて持って無いツスけど、マネ事なら出来る、っていうか、ただ名前だけ言ってみただけなんだけどね。

「ええ、じゃあソレでお願いするわ…」

「それじゃあ、明日詳細は決めますんで、今日はもう休みましょう。」

「ええ……」

さて、やる事は決まったし、俺も寝よ、ソファがあったし、ソコ借りよう…

トン、トン、トンとリズム良く包丁で野菜を切る、今日は3人分で足りるだろ。

さつきユリちゃんが起きて来て、おはようなんて言ってたが、今は22時、……早すぎるよ？

さて、霧川さんの部屋にはもちろん近づいていない、晩飯は冷蔵庫に入れておけばいいだろうね…もちろん一人分だけだね

「あれ？霧川さんと黒岩さんはあ？」

ユリちゃんは眠そうでそして興味なさそうだ

「うーん、今黒岩さんは霧川さんの部屋で拷問中―」

「わーたいへーん」

只今ユリちゃん睡魔と格闘中、あれなんだよね…寝言と会話しちゃいけないんだよね？……でも、ダメな理由が分からないんじゃない、つ

まらないよね？

実験開始！！

「今日の晩御飯はコロッケに肉じゃが、野菜炒めです、お味はどう？」

「…肉がいね」

「…黒岩さん大丈夫かな？」

「ジン君いないね」

……なるほど、噛み合わないからか。まあいいや、ジン君いないね、か、まあ、黒岩さんはきつとジンの事吐いちゃうだろうしな、へへへ、明日は面白くなりそ。

ハア、ハア、ハア、グッ…

「暗い部屋で男女が二人」ここからアナタは何を想像するだろうか？おそろくは、いやらしい感じを少なからず覚えるだろう、では…「縄に両手両足を縛られ、天井から吊され、上半身裸の男、それを眺める女」はどんなイメージだろうか？

おそらくそういうプレイと考える人が多いだろう、が…「マジ泣きの上半身あざだらけの縛られた男、それを見る、切れ顔の女」これで大部イメージが変わってきたと思う、いや正確になってきたと思う、そうこれはエロチックの欠片も無い、拷問である

「だ…から…アレは襲ったんじゃないくて、聞き出そうと…」

霧川の右手の竹刀がしなった（シャレじゃないし、シャレにならない）

バンッ！

「！？グハッ！」

「…だから何を聞き出そうとしたのかな？」

霧川は竹刀を黒岩の喉元に突き着ける。とられる、これは絶対殺られる。

「最期のチャンスだ、私もこんな酷い事はしたくないんだよ？」

そう言いながら霧川は黒岩の腹を蹴り、ニヤニヤ笑う。

た、すけて…

「霧川…いやアケミ聞いてくれ、コレは言うわけにはいかないんだ…」

頼む、もう蹴らないで…

「…ふーん、私に話せない事なんだあ？」

ヤバイヤバイヤバイ、子供みたいな笑顔を霧川がした時は絶対、そう、絶対に目を合わしちゃいけない、この前なんか、ちよつと実験していい？とか言つて、俺の体を左手で探つて、右手には「秘孔、一撃で決める」と題された本。

その後の記憶が無くなっている事は、今生きてる事の素晴らしさを物語っている。

俺は目を合わせないようにそっぽを向いた。

「ねえ、アキラ？アイアンメイデンって知ってる？」

そりゃ知ってる、要約すれば“鉄の処女”中がトゲだらけの棺桶みたいなやつだろ？有名な拷問器具の…

「それがどうした？」

「私思ったの、処女があるなら童貞があってもいいんじゃないかって、“鉄の童貞”なんで無いの？」

「…いや、だってなんかソレ、意地張ってるだけっぽいし。アイアンチェリーってなんか、カッコ悪いじゃん。」

「そう、じゃあ仕方がない、今作ってみようか？」

話し噛み合ってねえな。

だけと言いたい事は伝わったぞ。

悪い、ジンお前の事喋っちゃうわ、もう恐くて泣きそうなんだ。許せよ……

p m 3 : 0 0

いやー、仕事の打ち合わせが思いの外手間取ったな。
疲れた…家帰って少し休もう。

「ただいまー」

ガラガラと扉を開けた。

目の前に人が倒れてる。黒岩さんか？コレ？

「ジン、逃げ、ろ。まだ後、30秒残ってる…」

なんだかバスケのラストみたいな感じだけど…悟れたよ。

何が原因かはわからない、だけど、今日になってから一度もリンとは連絡が取れず、クロネコは俺になついて、この様な黒岩さん、そして近づいてくるこのプレッシャー、間違いない。

後24秒

踵を返し扉へ向かう

後20秒

黒岩さん悪い、俺は振り向けない、すまない

後17秒

扉を開ける、よし、行ける！

後15秒

目の前には無限に広がる自由、ああ助かったんだ…！

後13秒

視界にちらつと黒い何かが映った、なんだ？

後12秒

「喰らえ、外道！！」とリンは奇声を発した、しまった！俺とした事が！“何故黒岩さんは玄関にいたのか”答えは簡単だ、“直ぐに帰って来る人に会いたかったから”だ、ではなぜ倒れていたのか？“ソレを邪魔したい奴がいるから”だ。

そしてソレは霧川さんじゃない、霧川さんはまだ後10秒あるつまりは他にも敵がいたわけだ。
ぬかった…！

ブンッ！

リンは木刀で平一文字を描くが、しょせん素人タカがしれてる、
「使い慣れて無い得物をいきなり実戦に使うのは自殺行為だ」って黒岩さんが昔言ってたぜ！！

俺は腰を落として、ソレをかわす、そしてリンの脇を走り抜ける

後4秒

行け…！！

体とコンクリートが擦れる。どういう事！？

「ハハハハ、馬鹿めえ！バナナの皮で滑るとはまるで漫画ねー」

しまった！！木刀は伏せん、狙いは足下のバナナの皮から目をそらせる事！

後1秒

霧川さんの姿が肉眼で確認出来た。

…黒岩さんを普通に踏んでる…

あれ？黒岩さん、霧川さんの足を掴んで、俺に視線を投げてる

…！

まだ、間に合う！！距離にして5m、霧川さんでも4歩はかかるだろう。

立ち上がり前を向く。行ける、と自分の震える足に叩き込み、走り出す。

黒岩さんの行為と勇気を無為には扱わない！

「トウ！！」

ガンッ！！

な！リン、アイツ木刀を投げたの！？

足に木刀が絡む、またコンクリートに体が擦れる。

Game Over

「お帰り、ジン。待ってたのよ？」

霧川さんが俺の服を掴み破壊屋に連れ込む、助けて、助けて助けて！！！！

「ココか…」

トスッ…アレ？

何か霧川さんが俺に触れた瞬間、意識が……

「秘孔、試しておいて良かったわ…」

遠のく意識の中で俺にはそう聞こえたんだ。

ハイ、それで今に至る訳です、私ことジンは猿ぐつわを口にさせられ、天井から吊され、長々と拷問と恥辱の限りを尽され、ようやく（4時間後）、猿ぐつわを外され、言い訳でも聞こうか？と発言権を許された訳です。

「あの、何で…俺こんな…目に？」

息もまともにできず、遠のく意識を必死に捕まえる。

「あら？自分が何をやったのかも分かって無いの？」

と霧川さん、やめて、その左手に持ったカメラを下ろして。

今、俺はほとんど裸、パンツだけ、装着を許されてる、つまり、今、最期に言い残したい事は？と死刑執行人に聞かれてるような物なんだ。

「あるわけじゃないですよ、だってコイツ発情したんですもん」

とリン、コイツは俺の身体中にマジックで“犬”“発情中”“躰は必要”“犬権決定”とか書き殴ってる、テメエそれ、油性だろ？

「発情って…何の…こと、ですか？」

「アナタ昨日美人先生のお家にお泊まりしたんだって？」

霧川さんは今まで撮ってた俺の写真をパソコンに取り込むまさか…

「残念だ、君なら理性を保てると思ったのに」

と霧川さんは悲しい目をするが、口がにやけてる

まさか……

「君には罰をあたえなきゃならない、そう君の写真を全世界に公開だ！」

やーめーろー！！

「ちよつ、ちよつと…待つて、下、さい、俺発情なんてしてない、ですよ？」

恐くて涙が出てきた、もう喉も痛くて、意識が俺だけは！って逃げようとしてる。

「してない？あんた昨日私に電話で 綺麗だとやりやすい って、言っただじゃん？」

「いや…ソレは掃除…の………事だ。」

逃がすか！と意識を必死で掴む。

『掃除？』

リン、霧川さんは顔を見合わせる、まさか、まさかコイツら、勘違いで、俺や黒岩さんをこんな目に？

あ、ちなみに黒岩さんは俺の足下で ジンを助けた裏切り物、強い
と言えば女の敵 っと紙を張られ倒れてる、上半身は裸だが、酷い
アザだらけだ……

昨日何かあったな？

そしてもう“物”扱いなんだな……

「深夜に依頼人のしかも女の家で掃除だあ？」

霧川さんはカメラを置き代わりに竹刀を出してくる。

ああ、黒岩さん…アナタ昨日、拷問受けたんですね。

なのに、俺を助けようとしてくれたんですか？、アナタ本当に漢だ
よ、もう尊敬しか出来ねえよ。

「…掃除つと、言っても……実際は調査で、す……ゴミ袋が家に、
溜まって……その中に写真……が入ってて、ビリビリに破れて……て、
ソレが気になって……回収するために……掃除を………今そ
の紙切れは、…俺の財布の中に………」

リンが俺の財布からビニール袋を取り出し中身を確認する。

「……………入ってます。」
久々の真顔だな。

「……………」
霧川さんは何か考えてる。

黒岩さんは隣で唸ってる。

リンは笑ってる。

ああ、リン

「お前のせいかなぁ……！」

渾身の怒声をリンに浴びせ、俺の意識は旅立った

まったく、この怒りは誰にぶつけよう……

pm9:00

俺は部屋に倒れてた。身体中が痛くて、しかも悲しくて悔しくて、涙は止まらない。

しかも今この部屋真っ暗で余計に感情のタガが外れる。

ああ頼む、もう犬でも猿でも獣でもなんでもいい、どうか、どうか今日だけはいや今だけは独りにしてくれ……

破 4・中 壊（後書き）

ジン君は立ち直れるでしょうか？
俺だったら、多分無理かと思います。

破る4・後壊（前書き）

すみません、更新遅れました、まあアレです、カルシウムがきつと足りなかつたんです、階段から落ちたぐらいで右手親指がポキンと
いくなんて…

人生で初めての骨折でした…それともう一つ、今回は長いです、完全なる計画ミスです

破く4・後く壊

真つ暗な部屋の中で、しばらく目を閉じていると、また俺の意識は旅立った。もう身体中痛いし、泣き疲れたし。

あ、黒岩さんもう立ち直ったかな？あの人タフだからな…

「ふー、まあ、なんだ？何処から話ししようか？アケミ？」

形勢逆転した感じで、黒岩が霧川の部屋のソファーに座り、霧川はソレを見上げる形で正座している。

「いや、あの、今回は、リンが…」
シドロモドロ、目線は泳ぐ。

「ほー、俺もリンから話し聞いたが、お前は俺になにをしたんだっけ？」

黒岩は、今回結構マジで怒ってる、なんにせん2日で、少なくとも二回は意識が無くなってるわけで、その原因全て霧川の秘孔突きで、しかも、オチが勘違いと来たもんだから、もう色んな意味で感無量なわけだ。

「いや、その、ごめんね……いやでもね、でもね、アンタがあんな……」

「女々しいな、まだ言うか？俺が聞きたいのはそんな言い訳じゃない」

優しく、諭すようにゆつくりと黒岩は言い切った

「……………ごめんなさい。」

くっそ、今回は私が悪いから仕方がない、素直に謝ろう……………謝るけど、黒岩……………何さりげなく私の頭なでてんの？主従関係、狂ってないか！？

「さ、てと……俺身体中痛いんだけど？コレはどう責任取る？」

まだ責任取るの！？

いや、私が悪いんだから仕方がない、か……………クッソ、今回は少しやりすぎだな。

「な、何をやればいいの、……………でしょうか？」

何か気持ち敬語になるわね

悔しいけど、コイツこういう時だけ威圧感半端無いのよね……………将来、いいパパさんになりそう。

「あー、湿布を張ってくれ、で、俺が眠れるように歌でも歌って張ってくれ。」

私……歌って苦手なんだけど……………。

「あ、お前歌苦手だったな、仕方ない、じゃあ、これ以上無いくらい優しく張ってくれ」

……………こつ言つのもなんだけど、コイツ本当に心広いな、普通、

もつと私に仕返すでしょ？

それこそ、恥辱に満ちた、服のサイズの‘L’が抜けた奴とか…

………まあ、いいや。

「ん？何ニヤケてるんだ？今日は疲れてるんだから、早い所張ってくれ。」

アキラは言った、優しく張れと、……ようし、分かった。張ってやる、これ以上無いくらい優しく張ってやる、アキラは心広いから、こんな甘いけど、私は私の満足する罪滅ぼしをしよう。

「じゃあお望み通り、優しく、ね…？」

昨日の不幸を忘れられるくらい、幸せにしてやる。

…コ……………コン

暗い暗い真っ暗な空間にいる俺、何か聞こえてくるが、意識はまだ

この暗闇を望んでる。

.....ガッ.....

何か冷たい物が身体に当たる、止めて、くすぐりたい

.....今度は髪を撫でられてる感じがする。

!!!!!!!!!!?

顔に、冷たい物がああ！

ようやく、意識がパチツと帰って来た

「.....お、おはよう。」

目の前にはユリちゃんがいた、手には湿布を持ってる

「お、おはよう...あ、あのね、ジン君何かうなされてて、それに身体中あざだらけで。」

あーそうか、破壊屋にも、ちゃんと女の子はいたんだなー。

「うん、ありがとう」

クソッ、目を瞑るな俺！ひよっとしたら、コレで女性恐怖症が治せるかもしれないんだぞ！

頑張って起きろ！

「あっ寝てて、いいよ、私が張るから。」

え？いいの？俺、寝ていいの？.....あ、意識がまたボンヤリしてきた。

「う、ん、ありがとう」

……ユリちゃんの髪がカーテンみたいにすーと垂れてる、シャンブーの匂いがユリちゃんが動く度にくる……あーなんでだろう、普通は興奮する所なんだろうけど、すんごく、俺リラックスしてた…

幸せってこんな感じなのか？

すー…すー…すー

と優しいリズムで聞こえてくるのはジン君の寝息だ。

「寝ちゃった…」

私はそう呟き、ジン君が起きないように優しく髪を撫でた。

「起きないよね？」

と自問自答、答えは都合良いものに決まってる

でも、私はその答えを信じて、そつとジン君の額にキスをした。唇は、きつとまだ早いと思ったから、保留にしておこう。

「おやすみなさい。」

そつ言って私は部屋からそつと出た。

今気付いたけど、私、顔真っ赤だ……

おはようございます。

只今A M 8：00です

昨日は臨死体験をアンビリバボーしたので、やけに今日の朝日が綺麗に見えます。

ああ、生きてるなあ、俺。

昨日、夢見心地でユリちゃんと会った覚えがある、夢じゃ無いかと思っただけ、身体に張られた湿布が夢じゃないと教えてくれる。後でお礼言っておこう。

「さて、仕事しますか」

昨日の惨事は忘れよう、きっとそれが明日の笑顔に繋がると信じて。

「あつ、ジン君おはよう。ごめんね。私勘違いしてたみたい、許してね?」

そう、例え目の前に、悪びれる様子も反省の色も浮かべず

笑顔で文字面だけ整え、これで充分だろ？と胸を張る悪魔がいたとしても…

俺は許そう。

「まあ、……………気にするな、誰にでも勘違いは有る。」
よし、よく耐えた、偉いぞ、俺！！

「ハハハ、どうした？ジン君？何か今日優しいね、良かったー、やっぱしジンはそうじゃないと…」

そついい、リンはパソコンを操作し始める。

ん？

ちよつと待て。お前、今、何を編集してるんだ？？

…待て待て待て待て待て待て、ちよつと待て。

リン

お前

ソレ

「昨日の俺の写真じゃねえかあ！！！！！！」

前言撤回、コイツだけはきつとコイツだけは倒さないとイケない。

霧川さん、ちゃんと写真のデータ消しといてよ…

「うつさい！怒鳴るな！騒ぐな！そして動くな！」

そうリンは言いパソコンを操作する。

「もし、少しでも動けば、お前のこの写真を全世界に配信する！嫌

なら、動くな、そして分かったなら、頷け」

コイツ…何処まで、卑怯なんだ、でも落ち着け、ここで怒れば俺は今後きつとビクビクしながら生きなきゃいけない、そんなの嫌だ。だから、今は怒らず、後で写真を消してから怒ればいい」

俺はゆっくりと頷いた。

「よし…流石物わかりがいいね…じゃあこれから私が言う事をやれ。」

「

……あまりにお前理不尽じゃない？

「一つ…お前は犬権を承諾する

一つ…犬権に、1日2回の拒否権を与える

一つ…私は謝らない

一つ…お前は私に上記の事以外なら一つだけ、なんでも命令できる」

……コイツ、なんで、こんなに素直じゃないんだろっ。

素直に謝りゃ許してやるのに、憎まれ口と反省を混ぜ合わせて誤魔化すなんて、どんだけ照れ屋なんだ？

まあ、いい敢えてココは言わないでおこう。

「一つ…か。」

リンは相当恥ずかしいのかソッポ向いてる

あ、そういや、ちようどいい奴があつた。

「よし、じゃあ……」

「ちよつ、ちよつと待って!」

「……………なんだよ?」

「私、あの、その、イヤラシイ事は嫌だからね!」

コイツの中では、俺は常時発情中なのか?

「…大丈夫だ、そういう事ならお前は対象外だ。」

「良かった、私、アンタはてつきり、誰にでも発情するのかと……」

「……………、よし、じゃあ……」

俺は財布からビニール袋を出した。

「コレ、手伝え。」

中は紙切れの山。

「……………メンバー……」

その数ざつと、700枚くらい?

俺も正直やりたくなかったけど、ちようどいい、コイツにもやらせよう。

「期限は今日の五時、それまでにこの写真パズルを完成させよ。」
これを解けば、何とか手掛りがつかめるだろう……だって、あの人、
なんか、隠してる気がするんだもん

学校の帰り道を、依頼人、那美がフラフラと歩いている、手にはバツクを、心には影を
影には横幅を持たせて

「カウセリング…か」

正直な話し、ジン君のような子供ができるとは思わない、最近はおカウセリングにカッコイイとか、好きな目向けられている。時代が時代だし、仕方ない気もするが、実際、カウセリングや心理職関係の仕事をする人自身が、うつや心の病にかかる事は多いと聞いている。かくいう私もきっとそうなんだろう、私はただただ、良い先生になるうと、必死になって頑張った。生徒の悩みに真っ正面から向かって行った。それが、ハッピーエンドに繋がると信じて。
でも、世の中そんなドラマみたいな結末は待つてはいなかった。

どんなに親身になって相談に乗っても、必ず壁がある、‘自分、他人’という…いや、なくちゃいけないんだけど、その壁の向こうにみんな本当の気持ちを隠してる。

例え苦しいと、助けを求めて、相談をして来てくれる生徒でさえも、少なからず隠してる。

私はそれを聞き出そうと必死になってた…、
早く助けなきゃって焦ったのかもしれない、いや、私は問題を解決

できる先生なんだ、と自己満足に浸りたかっただけなのかもしれない

まあ、今となつては分かるはずないんだけど。

だけど、一つだけ、たった一つだけハッキリしている事は…私は失敗した。

「……………誰？」

完成した写真パズルを前にジンは呟いた。

「いや、今回の依頼人でしょ？那美さん」

リンが教える。

「それより、これ誰？」

「いや、依頼人の那美さんだろ？」

今度はジンが教える。

「……………」

「変わったな……」

「うん、変わったね」

写真は全部で、5枚ある

一枚目…那美さんが映ってるまだ痩せていた頃だ

二枚目…女生徒と一緒に映ってる

三枚目…また同じ生徒と映ってる

四枚目：那美さん一人だ…少し肥り初めて何故か、悲しそうな顔を
してる。

五枚目：かなり太った、今に近いな…

この女生徒、気になるな。

「この女生徒、誰？」分かるわけないと分かっているけど、リンに
聞いてみる。

「……………この子、ひよつとしたら。」

「えっ！？知ってんの？」

予想外な返答に流石に驚いた。

「いや、那美さんの学校で、自殺者が確か去年一人…女の子でいた
と思う。」

「…自殺者？」

マジか、まさかここまでシリアスになるとは思わなかった。

今、pm3：00…もう学校に問い合わせる時間も無いし、素直に
話してくれるとは思えない、仕方ない、今日は切札無しで挑むか、
……………ん？…待てよ……………。

さて、今日からジン君が私のカウンセラーだ、そうは言っても、私は
きっと自分の奥底をさらけださないでしょうね…

破壊屋…って名前に惹かれたのだって、本当はこの奥底にある物を壊したい、って思ったからなのに、いざ向かい会った時に出てきたのは、馬鹿げた嘘と道化の仮面、きっと私は臆病者になったのね。…フフ、ひよつとしてこのブヨブヨのお肉も本当の私を守るための鎧だったりして…

ずいぶん、頼りない鎧だなあー

ピンポーン

今、PM5:00だ、本当に時間ぴったりね。

「ハイハイ」

また、私は仮面を被る……結局、私は私を変えられないのでしよう…。

ドアを開けて、ホラ、ピエロ顔、顔に笑顔を張り付ける。

「…こんちはー、破壊屋お待ちツス、…アナタの鎧、壊しに来ました。」

ジン君が笑って言った。

私は自分の笑顔が氷付きはがれるのを感じた。

「……………私の鎧って？一体なんですか？あ、脂肪の事をかっこよく言ってくださったんですか？」

リビングで初めて会った時のように向かい合い座っている。

「いやいや、貴方の鎧はそんなブヨブヨとして壊れ安い代物じゃないでしょ？」

……………何故か、親に嘘がばれ、怒られた時に感じた恐怖感と似たものに、身体が縛られる

「…何の、事かしら？」

嫌だ、この奥底を見せるのは絶対嫌だ！

「…貴方は俺に脂肪を破壊して下さい、と言いました。だから俺は貴方の脂肪を破壊します、…ただ、ダイエットや食事制限では貴方の脂肪はきつと落とせません。何故なら…それが貴方の鎧になっているから。」

「……………言ってる意味が分からないわ、アナタさっき脂肪は鎧じゃないって言ったじゃない！」

「…ええ、脂肪ソレ自体は鎧でもなんでも有りません、俺が鎧って言ったのは、貴方の意思そのものの事です。つまり、《太ったままでいたい》いやむしろ、《太りたい》という願望の事です。」

「…どういう事？」

何が言いたいの…この子は…

「貴方の過去を調べさせていただきました。」

「……………！！！」

まさか…そんな、たった1日で…。

「貴方は素晴らしい先生だ、生徒の悩みに全力で挑んで、戦って、勉強以外にも大切な事を教えていた。」

「……………素晴らしい？、馬鹿言わないで、私は一人の生徒も…救えなかった。」

「オオハラ ナミ大原 波さん…の事ですか？」

驚いた、本当に1日で、ここまで…

「…………ええ、そうよ。私は彼女を救えなかった。私は彼女を助ける機会なんていくらでもあった、なのに私はソレに気付けなかった。」

「先生相談があるんだけど？」

波さんと初めて面と向かい会って話した時は、波さんから話しかけてくれたの

「ん？何、改まって…あ、出席日数ならまだ平気よ、ただ倫理が少し危ないかも。」

「あー…あの先生私苦手なんだよー」

彼女はとても明るくて、そうね、カワイイって言うべき生徒だったの。

「ソレよりね先生、私ね、最近、勉強がダメダメになってきたのだ」

始めはこんなたわいもない相談だった。

でも、先生と私って同じ名前だよね、って私達名前が一緒だったの、それもあつたのか波さんは良く私の事を信頼してくれて、私も彼女をまるで妹のように思えたの。

そうなってから、相談の内容も急速に親密な物になっていった。

好きな異性

家族との問題

ああ、あと電車内の痴漢撃退法も真剣に考えたわね。

そんなある日彼女からこんな相談があつたの

「先生、私…痩せたいんだけど、どうしたらいい？」

波さんはそんなに太っている子じゃなかった、ただ何と云うかぽっちゃりした感じの子だったの

「そんな事気にしないの、今が育ち盛りなんだから」
私はまた高校生によくある悩みだっと思っていたの、だけど

「先生やっぱし私痩せたい!!」

「今週から食事制限してるの。」

「あゝ、最近貧血多いの…」

波さんは真剣そのものだったの、願望とかそういう事じゃなくて、本気で痩せたい、って思っていたの

だから、目に見て波さんが弱っていくのが分かったわ。

当然私は止めるように、勧めた、これ以上やると拒食症にかかるかもしれないからって、だけど波さんは聞かなかった

「大丈夫だよ、私もう1ヶ月で3kg痩せられたし、ブイブイ」

なんて言っただけで波さんは笑いながらピースをしていたけど、身体はダルそうだった。

「ね、先生って太ってた事ある？」

いつだったか、波さんが私に聞いてきた事があった。

「うゝん、無かったかしらね、というか波さん…ダイエットはやめなさい、貴方体育の時倒れたってきいてるわよ。」

もう、この時には波さんの体調はとても悪い物になっていたの。

だから、私は助けてあげなくちゃって思ってた
「波さん、なんでそんなに痩せようとするの？」

直接に聞いてみたの。

「え…だってスリムだと美人じゃん。」

「波さんは充分カワイイわよ？」

「チツチツチツ…甘いな、先生、人間上を目指す生き物なのサ。」

「ふー…なら、無理しないでね？」

「大丈夫、大丈夫！」

そういつて彼女は次の日から学校を休みだしたの。

一週間、学校に出てこなくて、流石に何かあったのか、って思ってた
波さんのお宅に電話をしたの。

「もしもし、大原さんのお宅でしょうか？」

「ハイ、そうですか？」

電話に出たのは波さんのお母さんだったわ、

「私、波さんの担任をやらしていただいてる…」

「ああ！先生！那美先生ですか？」

「え？ハイそうです。あの、波さんの事についてなんです…」

「ええ、うちの子まだダイエットなんかしていて、ほとんどなにも

食べていないんです。だから学校にもダルクて行けない」とか言っ
て行かないんです。

……
「お願いします、先生貴方から何か言っただけて下さい、波はアナタ
の事をよく楽しそうに話していましたから、きっと、アナタからな
ら、波も聞いてくれると思うんです。」

私もコレは少し強く言わないといけないって思ったの、しかも両親
からも頼まれたわけだし、ダイエットを辞めさせようと、それしか
考え無かったの

本当に波さんが単純な理由で痩せたいって思ってるんだって信じて
……。

「波さん？」

「あ……先生？」

「そうよ、アナタどうしたの？」

「え？うーん少し頑張り過ぎちゃったみたい」

「波さん、ダイエットなんかやめなさい、そんな事で体壊したら大
変よ？」

それに学校に来るのが今の貴方のやるべき事でしょ？」

「……………“なんか”って“そんな事”って、…………先生、私
頑張ってるんだよ？」

……受話器の向こうから濁った声が返ってきた、私はそれが電話特

有の濁りじゃない事には気付いていた、けど、もう一押しだ、ダイエツトを辞めさせるんだ、しか考え無かった私はソレを無視した。

「波さん、貴方が今、頑張る事はきつと、違う事よ？
部活だったり勉強だったり、たくさん頑張る事はあるはずよ？だから、ダイエツトなんて、やめなさい。」

彼女は泣いていた。

無視出来ないくらいに泣いていた。

「先生、私…なんで、やっぱり私は無理なの？」

先生…私、私……………？」

最後は泣き声で何を言っているか分からなかったわ、その時は…

「波さん…ねえ、アレ？」

もうその時には電話は切れていたの、掛けなおしても出るのは両親だけ、波さんは出なかったの

そして、それから3日後

彼女は死んだ。

自殺だった、睡眠薬の大量摂取で両親も気付か無かったらしい

理由は分からなかった

だけど、私には波さんの自殺を辞めさせるチャンスはきつといくらでもあったと思う、だから波さんのお葬式は足が重かったわ。

もちろんご両親に合わせる顔なんて私には無かった、私自身、悔しくて悲しくて、顔なんて合わせられなかったけどね。

そんな私に波さんのご両親は優しく、貴方のせいではありません、と言ってくれた。

そして私に、波さんが書いた私宛ての手紙を渡した

「中身は見ていません、ですが、波はいつも貴方の事を親しそうに話しておりました…」

先生、ありがとうございます…」

波さんが私の事を？

ふっと波さんの笑顔が蘇る。

涙が止まらなかった。

その後、私は家に帰り、服も着替えず、波さんからの手紙をの封を開けた、中には手紙と波さんが撮った私の写真が一枚、私と波さんが二人で写ったのが二枚入ってた

那美先生へ

きっと先生がこの手紙を読んでいる時には、私はこの世にいないかと思っています。

先生は私が死んだ理由が分からないでしょう。

うーん、私も色々と考えたんだ、この理由を知って、先生が苦しむんじゃないか…とかさ、でも分からないまま、モヤモヤされるのも嫌だし、先生…アナタだけに全てをお話しします。

あのね、先生…私ね先生の事憧れてたんだよ、もう本当に純粹に“こんな人になりたい”って思ってた。

優しくて、誰にでも正面からぶつかって行って、だけど冗談の分かってくれる、そんな先生にスッゴイスッゴイ憧れてたんだ。

私…先生に少しでも近づきたくて、先生のマネ結構してたんだ。けどあんまりうまくいかなかった

先生みたいに優しく強くななんて成れなかった。

今度はその理由を考えた、どうやったら先生みたいになれるか…本当に真剣に考えたの、そしたら、一つだけ思い浮かんだ。

“まず外見から先生に似よう”って、だから私はダイエットを始めたの。

でも私、体力無くてさー直ぐに体調崩しちゃった。

それでも頑張り続けたら先生から直接に注意されちゃった…

結構…ヘコンだよ。

そしたらなんか急に何もやる気が起きなくなっちゃって、学校も面倒で食べ物体が受け付けなかった

アハハ、変な話しだよー

私先生みたいに成りたかっただけなのにね。

そんな時だったの先生から電話が来たのは。

先生が私に“ダイエットなんか”とか“そんな事”って言った時、

私ね、先生に

「お前なんか私を目指すんじゃない」
って言われた気がして、本当にショックだったんだ。

先生からみたら本当にクダナイ事かもしれないけど、私は真剣だった、お願いだから、先生この事実だけは理解してね？

うーんとね、もっと先生と話したかったけど、…ごめんなさい。
私もう、なんか…へへ、疲れちゃった。

涙は本当に枯れたし。

先生の言ってた通り拒食症になっちゃったし。

ごめんなさい、やっぱり先生の言う事聞いてれば良かったね。

だけど最後コレだけは言わせて

先生、私先生の事大好きです

それから、この手紙を読んでもお願いだから、今のままの先生でいて、私がこの手紙を書いた理由は先生に私の本当の事を知って欲しかったのと、先生に今のままでいてもらうために書きました

なんか…先生のせいみたいな言い方になっちゃった、本当に最後まで私できそこないだね。

は、次に生まれてくる事がもし可能なら、先生、また笑顔でアナタと会いたいな…。

じゃあ先生、私そろそろ眠くなってきちゃたから、もう寝るね。

それじゃあ、おやすみなさい。

波より

ああ、全て納得いったわ、全てが繋がったわ、そうだったのね

あの時の聞き取れ無かった電話の声

今になってようやく、聞いた、“私じゃ、先生にはなれないの？”

波さん、私は貴方の死を悲しむ資格なんて無かった

波さん、貴方はもう私に近づけない、だから今度は私が貴方に近づいて行くわ。それが今の私に出来る、きつと唯一の償いだから…

「……………」

「分かる？ジン君？私は生徒一人その気持ちを理解出来ず、死にまで追いやったのよ。」

「……………」

「だから、ね、ごめんなさい、今回の依頼はキャンセルで、コレは私の償いだから…」

あの写真は私が波さんに近づいていく証明写真。
きつと、終わりは無いでしょうね。

「……………貴方は、また波さんを裏切るつもりですか？」

「……………何の事？」

「貴方が太ろうとしているのは、そんな綺麗な気持ちからでは無いでしょ？」

「……………いいえ、今の気持ちに嘘は無いわ」

「信心に波さんに償いをしたいと考えているなら、貴方は昔の貴方のままでいなければならないはずです、ソレが波さんが望んだ事なんだから。」

「じゃあ、逆に聞くけど、一体私は何のために太ろうとしているの？」

「……………貴方は波さんを殺したと考えています、だから貴方は貴方じゃなくなるうとした、波さんに近づくななんて理由にかこつけて」

「……………そんな、まさか！」

「人は髪型一つ変えただけで大分イメージが変わるものです、特に女性は、だから貴方は鏡に映る自分の姿をまるで別人にした…そのための脂肪です。」

……………まさか、私が？

「貴方自身は気付いてないかもしれませんが、いや気付いていない振りをしているだけかもしれません、逃げてるんですよ」

「……………」

「最初に言いました、貴方の脂肪を破壊します…と、そして契約書には今の貴方には戻れないとあったはずですよ」

「…じゃあ、私は一体何をすれば良いって言うのよ!」

「逃げないでください、貴方は貴方の役目をやり続けてください、波さんは貴方に何を望みましたか？」

波さんの本当の気持ちに気付いてあげられなかった事を償いたいなら、波さんの本当の気持ちに応えてあげるべきではないんですか？」

「私は……私……は……………」

波さん…私、逃げてたの？

貴方の気持ちに気付いて上げられなかっただけでなく、気付いたら今度は逃げてたの？

「……フフ、私って最悪な女ね……………」

「いや、人間ほとんどそんな物ですよ、かく言う波さんもきつとそうだったんだと思います。」

「……………やっぱり私達似ていたのね。」

ジン君がカバンから何かを出してる。

「…ええ、きつと似ていたんだと思いますよ、……………コレを」

ジン君が封筒を出してくる。

「何？コレは？」

中には写真が入ってる、5枚ある。

「これ……………」

「ええ、失礼かと思っただんですけどあの掃除した時に。」

中には前にビリビリに破り棄てた写真があつた、そっか、やっぱり私は逃げてたんだ。

「…次にコレを」

「え？コレは？」

「見ての通り、カメラです、インスタントの」

「何をしろというの？私に？」

「ハハハ、今度はちゃんと波さんに近づいて貰おうと思ひまして…
痩せていく写真を撮って頂きたいんですよ。」

「……………」

「そのためにバラバラになった写真を綺麗に戻しました。」

「……フフ……ハアー、貴方はスゴいわね、まさか私自身、気付いていない所まで潜り込んでくるなんて、しかも物の見事に破壊までしてくれて。」

「まあ、ソレが仕事ですから。」

ジン君は何処か照れたように目線を外しながら言った、うん、確かに少し臭いセリフだったかも

「さて、俺の仕事はここまでツスよ、後は貴方しだい、と言ってもやる事なんて一つしかないですけどね」

「……分かりました、痩せます、痩せて波さんの気持ちに応えます。」

「了解です、なら週一で写真送って下さい。ソレでお金はこちらに送って下さい。」

ジン君が住所が書かれた紙を渡してきた。

金額は、1,5000円、まあ、安い物ね。

「じゃあ俺はコレで………負けないくださいね？」

「……ええ、もう逃げないわ、絶対。」

ジン君は満足そうに笑って帰って行った。

……波さん、ようやく本当に貴方の気持ち聞き取れたわ

外には月が光って、珍しいくらい沢山の星が見えてた

後日談

さてさて、今日も仕事は上手くいきました。しかし、まあ……今回、影ながら尽力して頂いた方に湿布のお礼も込めて何か、プレゼントしたいと思ってます

え？何処で協力してくれたか？

ああ、言ってますでしたね、ほら俺が波さんの情報を手に入れる時に困ったでしょ？

その時にユリちゃんに頼んで、ハッキングしてもらったんだ。

なんか学校のパソコンってまだセキュリティが甘い部分があるらしくて、意外と簡単に出来るらしい。

さて、プレゼントと言っても何が良いだろう？

うーん……

黒岩さんなら確か霧川さんに花とかよくあげてるけど。

何か違う気がするし…

ユリちゃんの好きな物……ぬいぐるみ…はちよいとなんか俺が買
いにくいような……

あつ、そうだ。

ココはアクセサリー系でいくかな。

うん、ソレで行こう

ネックレスは高いし、イヤリングはユリちゃん穴無いし、ココは指
輪で良いかな？

その後、ユリちゃんに指輪をあげたら、なぜか、リンに俺の写真を
公開されて消すのに半月もかかるうとは、今の俺に知るよしもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8514b/>

破壊屋

2010年10月22日05時08分発行